

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回）日發行
昭和十三年六月廿日印刷納本
昭和十三年七月一日發行

第四卷 第七號

浄土

七月號



◇仕奉後銃・久持忍堅◇

◎一圓の淨財・一年の慰問

君國のために身命を賭した白衣の勇士達は今や到る處に戦傷を癒し、病苦を養ふておられます。これ等の方々に心の糧として吾等が誇りとする、信仰の伴侶雑誌「淨土」を贈つて法味を愛樂して頂かうと思ひます。何卒この聖なる運動に速時參加して下さい。

病院
慰問

白衣の勇士に法味を捧げよ

◇全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至五十部の雑誌「淨土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げた
いと存じます。

◇御一人一圓の淨財を御喜捨下さい。一年間毎月雑誌が病院へ参ります。

◇毎月五千部は是非入用です。五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。

◇個人でも、團體でも、亦金高が一圓以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。

◇御送金は淨土宗務所事務宛に！領收の證には宗報誌上に御芳名を掲載します。

◎一冊の淨土・一生の歡喜

我が信仰

往念懺本知
生佛悔願恩
院

郁芳隨圓
武者小路實篤
吉田絃二郎
佐藤春夫
岡本かの子

四六判二色刷表紙付
定價六錢（送料三錢）
二十部以上一時に購入
の方には一部五錢とす。
法然上人鑽仰會編

この時代の信仰は？ 念佛の眞骨
頂は？ 法然上人は？ 文壇の巨星
が隨筆風に表現された、新鮮な信仰
の言葉は何人の胸にも法悦の燈びを
點ぜずにはおかない！
この内容、この定價！本書こそ布
教用書の最高峰を行くものである！

振東替京東芝公團照明會館



◇ 浄土 第四卷 第七號 七月號 目次 ◇

表紙・アカバンサスの花

井上正春

扉繪・朝顔

顔

鈴木金平

時局下の孟蘭盆會

大村桂巖 (二)

凡人凡悟

吉田絃二郎

(三)

均合の取れた人間

渡邊順 (二四)

塔婆の話

江藤澂英 (二八)

お

盆

松浦一 (四)

信仰相談

中村辨康 (四)

苦惱を脱却したい・讀佛の經文・悔いざれば罪來る

法然上人をめぐる人々 小倉の上人

江上秀靜 (四)

隨筆 彌陀開眼

和田正系 (四)



小説 小さな世相……………一瀬直行(六)

長篇小説 血しぶきの法將……………飯田光明(六)

憶ひ。出新たな友田伍長

本誌記者

國際事情解説……………中田一郎(五)

歌壇……………與謝野晶子選(三)
俳壇……………太田耳動子選(五)

家庭と婦人

婦人の輿論……………生田花世(四)
信仰の力……………澤幸江(四)
眼の誘惑……………高瀬磯(四)

一頁評論・貯蓄の奨勵……………(五)

法語解説 崇高な自覺……………中村辨康(五)

編輯後記……………(五)
鑽仰運動ニユース……………(五)

◆浄土◆ 第四卷 第七號 七月號 目次◆



食物に
對する

本能的の誤謬

動物はその本能に委せて置いても體內に不足する養分を正しく食物から補充出来るかと言ふと、之に就いて面白い實驗があります。

例へば白鼠に白米團子と、白米に野菜類、ビタミン等を混ぜて作った團子と兩方與へると、白鼠はビタミンの全くない白米團子を好んで食べ、瘦せ衰へて遂に斃死します。

之は生理的要求に對して本能が全然盲目であると言ふ一例であります。我々の食物に對する嗜好も玄米より白米が選ばれ野菜よりは肉類を好むのはどうする事も出来ぬ事實です。

然し乍らその結果招來されるビタミンの不足は體內の生理的機能に種々の障害を與へるもので、腺病性虛弱體質、妊産婦の衰弱、虛弱兒童、呼吸器系疾病等の原因の一半は明らかに偏食によるビタミンA及Dの不足であると言はれます。

「理研ビタミン」の常用は、かかる養分上の缺陷を是正し、正しき健康の維持増進に頗る有効なることが認められて居ります。

尚理研ビタミンには服用し易い小粒製品もあり、五拾球入一圓卅錢百球入五拾錢 全國藥店百貨店藥品部に販賣

法然上人鑽仰會刊行圖書

中村 辨康 著 法然上人の信仰生活

定價三十錢 送料六錢

中村 辨康 著 信仰讀本

同 講話一枚起請文

定價十錢 送料三錢

藤井 實應 編 法然上人法語抄

中山 介山 著 法然上人

定價六十錢 送料六錢

大野 法道 著 法然上人

佐藤 春夫 著 掬水譚

定價四圓五十錢 送料二十二錢

淨土

往生はよにやすけれど

みな人の

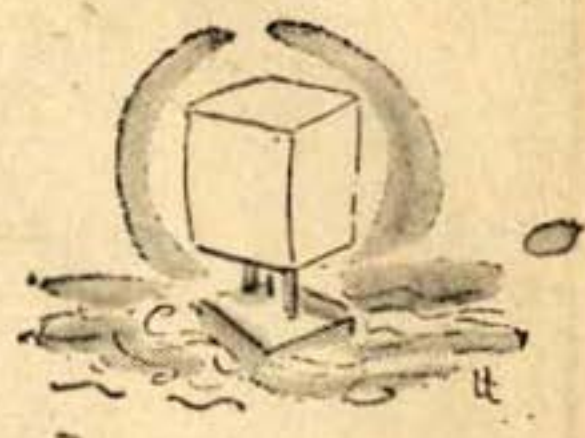
まことのころ

なくてこそせね

法然上人詠歌

七月號





時局下の孟蘭盆會

大村 桂 巖

孟蘭盆とは印度語であつて之を翻譯して倒懸といふ、倒懸とは逆様にかゝつて居る苦しみのことで堪へられぬ非常な苦しみを受けて居るといふ意味である。此世の中でよくない事をして置いた爲めに死して後非常なむごたらしい苦しみを受けるといふのである。そこで此苦を受けて居る死者を救ふ爲めの勤行が孟蘭盆會なのである。抑もこのうら盆の起源といふのは、目連尊者の母親が生存中、慾が深く、物惜しみをし、人に對する同情親切心乏しく、人に物を施すといふやうな事はなく、却て我子の目連尊者が憐れな人に施さうとして、母親に預けて置いた金品までも横取してしまつた。その罪で死後地獄に墮ちて苦しんでゐる。これを知つた目連尊者の悲歎やる方なく、釋尊に訴へた所、釋尊も同情されてその救済の方法として教へられたのがこの孟蘭盆會である。

印度は非常に梅雨がひどくて長期に亘る。その間は外へ出て修行することが難かしい。そこで釋尊は弟子達に命じて四月十六日

から七月十五日迄三箇月間、外出せずに堂内で修行せしめられた。之を夏安居と言ふのである。其七月十五日の最後の日を僧自恣の日と言つて、各自が皆な自分の從來の所行一切を告白して、心の洗濯をし安心し満足してゐる日である。この日に其等僧侶に供養して讀經回向して貰へば、母親は助かると教へられたので、目連尊者は佛の教への如く勤められ、遂に母親も助かることが出来たといふのが、うら盆の始まりであるのである。目連尊者は釋尊の十大弟子の一人で通力の妙に達してゐた人であつたが、又非常に親孝行家であつたのである。

さうしてそのおつとめの内容は、施餓鬼會をつとめるのである。施餓鬼とは餓鬼に食物を施すことである。餓鬼とは慾の深い者をいふのである。此世で慳吝貪欲の所行をしてゐた者は死後、飢渴に苦しむ世界に生れるといふのである。つまり少しも人に施與などしないやうな無慈悲な者は、又た自分の生命を續けることも出

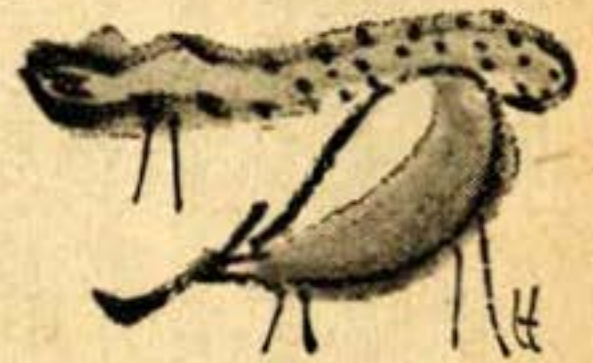
來ない。食ふに糧なく飲むに水なく常に腹がへり口がかわき苦し
みもだえて日夜泣いて暮してゐる境涯に墮ちてゐるのである。罪
の報いで食物が前に來ても食べられず水を口へ持つて行つても火
となつて燃え上がつてしまふのである、故に先づ彼等の精神から
直ほしてかゝらねばならぬ、心から救つて懺悔改心せしめ、それ
から食を興へ衣を興へて救つてやるやうにしなければならぬ。盆
施餓鬼とはかゝる物心兩方面の救済を教へてゐるのである。

盂蘭盆は先づ死者の靈を念ごころに弔ふことを教へ、父母祖先の
恩徳を思ひ追善供養を忘れないやうにと訓されてゐるのである。
殊に家に嗣子なくて自分等の死後の弔ひをしてくれる者の無い人
は餓鬼道に墮ちると言つてあるから、人々は是等の意味を深く味
はなければならぬ。

我國では盆正と言つて正月と盆とは一年間の二大行事となつて
ゐる。正月は新生を祝福する節會、盂蘭盆は死者を追弔する勤行
となつてゐる。生を喜ぶと同時に死を弔ふことも大切である。殊
に日本民族は七生報國とか死して護國の鬼となるとか言つて靖國
神社を始め諸國に招魂社あり招魂祭のあること、其他の如何なる
神社と雖も皆な其靈の死後も生前と少しも變らずあらたかにまし
ますものとの深き堅き信仰から祀られてゐるのである。精靈の存
續を疑はない民族であるから家には佛壇に位牌を祀り寺には墓所
を築いて香花を手向けるのである。この祖先尊崇、敬神崇佛の風

習の強いことは恐くは世界稀れであらう。こゝに家族主義の力が
養はれ、父母祖先への孝道は益々盛んになり、忠孝の道が子孫に
傳はり、萬國無比の國體もいやさかに榮えるのである。實に祖先
を想ひ、死者を弔ふといふことは、個人としても家族としても國
民としても、新しい生命の益々更に發展し増殖せらるゝ原動力と
なるものである。正月と盂蘭盆とは如此相互密接不離の厚生關
係をもつて居るものである。

今日のこの事變に於て當初已來我國の將兵中に名譽の戦死をせ
られた人も少くない。吾等は決して之を他人事としてはならない、
是等の人は皆喜んで皇國の爲めに萬歳の隣と共に護國の鬼とな
つてくだすつたのであるが、吾人一般國民殊に銃後の守りをして
ゐる吾々としては、この夏の盂蘭盆會には知ると知らざるとを問
はず是等の「事變戦死者の靈」と書いた位牌を佛壇に安置し、香花
や茶菓を供へて懇ろに追弔回向する事を忘れてはならぬ。かゝる
慰靈追弔が行届いてこそ將來の國力が益々發展して行くのである
これ、忠孝道德の實踐であると共に宗教靈化の體驗である。布
いて強慾慳貪なる餓鬼所行の重罪なる反省自覺ともなり、隣保互
助の全體的布施的同胞心の養成となり、殊に今日の時局に於て堅
忍持久、勤儉力行、以て盡忠報國、皇威宣揚の國民精神總動員の
大運動に貢獻するやう皆努力しなければならぬ。これ特に今年の
盂蘭盆の一層意義深き所以である。(完)



お

盆^{ぼん}

松 浦

一

事物の名に「お」の字を附けて呼ぶことは、婦人の言葉には非常に多い。この「お」が言葉遣ひを丁寧にし、やさしくするといふことは言ふまでもないことである。婦人の美德のやさしさ、そのやさしいたしなみが、かういふことにも現れる、これはゆかしいことでもある。併し男女の別を問はず、どうしてもこの「お」をかぶせることなしには能く言ひ得ない場合がある。それには先づ先方に對しての挨拶である故に丁寧ならざるを得ぬことがある。例へば時候の挨拶には、男でも、女でも、暑い時には「お暑うございます」と云ふ。暑いといふことに敬意を拂ふ譯ではなく、先方に對しての挨拶故の「お」の字である。併し又これとは別に、その事物自體の持つ尊さの故に、親しさの故に、懐かしさの故に、うれしさの故に、慕はしさの故に、自ら「お」をかぶせて呼ぶ場合がある。さうしてその最も著しいものゝ一つがこの「お盆」であるのである。「盆」と正

月」といふやうな言ひ方をする場合は別として、「盆」の持つ言葉の味は「お盆」ならでは出て來ない。「お盆」「お盆」——嗚呼何といふ懐かしい言葉だらう、何といふ慕はしい言葉だらう。その時は佛壇も新に入念に淨められ、飾られ、お供物にも亡き人に通ふ心の跡は残つて、たゞならぬ心地さへする。「お盆」「お盆」——「お」といふ響の持つなごやかさは何物にも替へ難い。お盆とは如何なるものか、の説明は年々各處で繰返される。お盆とは盂蘭盆會のことであり、盂蘭盆とは倒懸といふこと、倒懸とはさかさまにぶるさがることで非常な苦しみといふこと、盂蘭盆經に據れば、佛の十大弟子の一人である目連尊者が神通力を以て觀ると、その亡き母が今は餓鬼道に墮ちて飲食も出來ず大變な苦みをして居られるので、目連非常に悲しがり鉢に飯を盛つて母に上げ、母はこれを食べようとして口に持つて行くとそれが忽ち火となつて食べられず、目連は泣き叫んで佛

の許に馳せ歸りその事を述べてこれを救ふ教を請ふと、佛はその母の罪障深き故であることを論し、これを救ふには衆僧の力でなければならぬことを教へ、僧侶の安居（印度にて僧が雨期三ヶ月間外出せずして坐禪修學を爲すこと）の終る七月十五日に現在己れの生みの親又過去七世の父母の爲に種々の供物を以て僧に供養しその功德を受くべきことを示された、これがお盆の起原であるといふこと、私達はかういふことを知つた時でも、知らない時と同様に、お盆はやつぱりお盆であつて、盂蘭盆會であらうとなからうとさういふことには關はりのない心地がします。事實お盆と云ふ時には過去七世の父母ばかりではない、亡くなつたこの家の一切の精霊が仲よく麻幹の煙に乗つて賑やかに佛壇の中に這入つて來ることを思ふ。佛壇の中の佛像や位牌の前に供へた物もお盆は殊に賑やかだ。坊さんの棚經もこの時ならでは味へぬうれしい賑やかなものゝ一つだ。親戚同士がお互の家々にお詣りに往き來する。これもお盆ならでは見られぬ賑やかなものゝ一つだ。佛壇の前に端坐して木魚を叩き念佛を唱へるのは、私の家などでは、お盆にかゝしたことはない。母もする、娘達もする、私もする。さうしてこれが私の現在の家族の全部だ。物の底から鳴り出すやうな木魚の音は、母の聲とまじり、娘達の聲とまじり、私の聲とまじり、香の煙とまじり、花の色や香とまじり、蠟燭の光とまじり、百味の食

の香とまじつて、佛様と一緒にゐる亡き數々の戀しき人の處に響いて行くのである。これが私達のお盆だ。さうして寂しき心を以てまた麻幹の煙に載せて懐かしい精霊を再び送り出すのである。一年後のまたの逢ふ日を頼みとして。これが私達のお盆だ。私達は私達の精霊に餓鬼道の事をも思はない。目連尊者の孝心の話は私達にはその尊者の有難き話としてのみ親しまれる。

私は私の歌稿を取り出し、去年のお盆に詠んだものを今更に懐かしんだ。

迎へ火をかこむ人數少なきもさびしきものゝ一つなりけり
なき靈を迎へ送りてけふもまたこの世の朝に目覺めつるか
な

これは七月十七日とある。その日には私はまたこんな歌をも詠んでゐた。

空ひくゝうす雲走る北へ北へその雲さへも見えずなりにき
豆腐切る音はこゝまで聞えしが消えて音なき朝のそよ風
過ぎしものには心ひかるゝ、まして再びこの世に於て相逢ふ
ことなきゆかり深き人々には。

なつかしと思ふ心をなつかしみ住めば今年も魂祭かな

血^ちしぶきの法^{ほつ}將^{しやう}

— 住^{ぢう}蓮^{れん}と安^{あん}樂^{らく} —

飯田 光明

鈴木 金平畫



四、鈴蟲の死

一

「お父上さま、お父上さま！」

絹の几帳がびりつと引き裂けたやうなこゑだつた。

侍女の咲尾は、はつとして立ち上り、慌て鈴蟲の枕邊にかしづいた。白蠟のやうに血の氣を失つた主人の寝顔を打ち守りながら、二言三言、

「旦那さま、お目覺め下さりませ」

耳近く續けさまに聲かけてみるのだつたが、鈴蟲には通じなかつた。昏々と幽明の境をでもさ迷つてゐるのだらう、顔面の筋肉は時々軽い痙攣を起してびく／＼と動いたりした。

咲尾はちつと見守つてゐる。鈴蟲の全身が崇高な氣品さに包まれてゐて、觀世音のやうに見えた。十一月も末近くなつた初冬の冷たい風が、何處からともなく洩れてはいつた。が、鈴蟲の額にはじつとりと汗ばんでゐた。水で絞つた白布を、咲尾はそつとその額にあてて、何度も何度もしました。そして暫時見てゐると、また汗が、無數の、小さな小さな泡のやうに浮いてくるのだつた。

まあ、きついお熱、早うお目覺め下さりませ——、氣立てのやさしい主人おもひの咲尾は、目頭をうるませて、神にともなく、佛にとも

らく、たゞ心の中で涙とそんなことを呟きながら、白布を絞つてはとり代へてゐた。

「あゝ、美くしいお運、大きなお運！」

「まあ、旦那さま！」

「咲尾かえ、まあ見てごらん。あのお運、白いく／＼美くしいお運！

ぼつかりと咲くのよ。今咲くのよ！ 見えて見えて？」

「お目覺め下さりませや！」

咲尾はたまりかねて兩の袂を顔に押しあて、こゑもおろ／＼と、

「旦那さま、旦那さま！」

そしてすゝり泣くのだつた。

去年の秋から丸一年、大洲々々と郷里戀しさに身もだえて來た鈴蟲のこと、十二單も何度かなぐり捨てたことだらう。自由の、廣い廣い天地に飛び立つてみたいと、綾、錦の帯でがんじがらめにされた身體を、どんなにもどかしくもてあそんで來たか知れない。茜のさした夏の夕方など、よく、大洲はあの茜さす空の下などゝ、とつぶりと日の暮れるまで、帷の中からあかずに眺めたものだつた。ちつと眺めてゐる中に、涙がにじんで出たりした。こんなときには、侍女の咲尾も悲しくなるのだつたが、ある時、咲尾は自分も泣いてゐながら泣いてはならじと無理笑ひに紛らせて、

「旦那さま、かうしてごらんあそばせ」

さう言つて鈴蟲の方へ自分の顔を向けて、しつかりと兩眼をつむつ

たことがある。そして自分は目を開いて、につと笑ひながら、

「旦那さま、お目をつむるのでござりますよ」

鈴虫は何のことだらうと思つて目を閉じた。閉じた拍子に、目に溜つてゐた涙が、ぼろつと落ちた。

「咲尾、まつ暗らではないの。何も見えないではないかえ」

「ほゝゝゝ、ほゝゝゝ」

咲尾は顔を覆うて面白く笑ふのだつたが、實は笑ふと見せかけて涙をぬぐうてゐたのである。そして言ふのだつた。

「旦那さま、あまりお泣きあそばすとお目が潰れてしまひます程に――」

座頭さんは何時もこのやうにまつ暗らでござりませうよ。美しくい茜の空も、座頭さんには見えないのでござりませう」

「咲尾、あまり泣くと座頭さんになつてしまふのかえ？」

「は、はい。泣きつぶれると申します」

「判りました、咲尾。そなたも泣かないでたも」

「は、はい」

こんなつもりではなかつたのだ、面白うお慰めしようとしたのが、却つてこんな濡れ場を招いた、さう思ふと前にも増して涙が湧いて來たものだつた。

もとく、ひ弱い生れつきの鈴虫は、その時分から氣色がすぐれなかつたのである。八月、九月、十月、そして十一月の初めから、たうとう褥床についてしまつた。

褥床に就いてしまふと、もう起きる氣力もなかつた。一日々々と病みほうけて行くのが鈴虫自身にもわかつた。死んで逝くのか知ら――、限りない寂しさが胸に應へてくるのだつた。

十日、二十日、氣もどかしいうちに、日がだんくんと經つていつた。定められた自分の部屋の、何時に變らぬ同じ調度を、明けても暮れても眺めてゐるのである。味氣ないことだつた。

風のない晴れた朝など、庭樹の梢がくつきりと障子に映るのだつた。

二三日前もこんなことがあつた。

「咲尾、お頼みます。力を貸してたも。そつと起きてお庭を眺めたいのです」

「まあ、旦那さま、ご無理でござります。どうぞく辛稼下さりませ」

「いえ、大丈夫。今度こそ立つて歩いて見せう程に」

咲尾は鈴虫の意中がわかつてゐた。だから鈴虫よりも咲尾の方が涙ぐんでしまふのである。

「旦那さま、妾を存分に泣かせて下さりませ」

陽射に映る障子の影繪、何でもないことなのだが、感性的な彼女達には、幼い時の、大洲の館での記憶が思ひ出されて悲しく泣けてくるのだつた。

まだ鈴虫が千足と呼ばれてゐた八歳か九歳の時分、一つ年下の咲尾が

遊び明輩として稻葉の家へ召しかゝへられて來たのである。珍らしい、雪のある朝のことだつた。鈴蟲が雪を食べるのだと言つて、どうなだめすかされても肯かなかつとき、咲尾には奥方、鈴蟲には母——、まだ三十になるかならずの藤たけた律子が、駒下駄をはいて庭に降り

てゆき、巻繪のついた二つの小さいお椀に、木の枝の雪をとつて來て、香の高い蜜をかけてくれたことがある。その雪を炬燵にあたりながら、二人で嬉しく食べた記憶。あの時も雪を盛つた庭樹の風情が、くつきりと障子に映つてゐた——。雪こそなければ、今のこの陽射、こ

の影繪、はからずも二人は、幼い時の同じ思い出を呼びさましてゐたのである。鈴蟲は支へられて、やう／＼襦袢の上に半身を起こし、

「のう、咲尾」

「はい」

「そなたも、大洲の郷里の母上をおもひやるかえ？ そなたのお母さまのことを」

「は、はい」

「けれどそなたはまた逢うてお話も出来るし、幸せやのう。妾はもうお出會ひすることもかなひますまい」

「そのやうなお悲しいことを」

「いえ／＼、咲尾。みんな前世からの約束ごと、諦めてゐます。母上さまとでもご病氣でなければ、きつとお顔を見せに來て下さりませうけど——」



「そんな、そんな、お悲しいことを！」

涙がさきに立つて睨もつかへた。旦那さまはお死にあそばすのか知ら——ちらつと鈴蟲の顔を見た。

「いえ／＼、きいてたも咲尾。そなたがきいてくれないのなら、あゝ、誰に訴へるの。そなた一人を頼りに縋つてゐるではないかえ」

「ご勿體ないことを！」

「のう、きいてたも。夢なの、夢の話なの」

さう言つて、まだ消えもやらぬ夢の行方を追うてでもゐるやうに、しばらく兩の臉を閉ぢてゐたが、閉ぢられた兩眼には見る／＼涙が溜つて來た。せつなう咽びなくこゑもいたいたしかつた。

「悲しゆござります、旦那さま！」

「咲尾、もうきいてたもるな。やつぱりきいてたもるなえ」

誰にも打ち明けたことのない、自分だけの恐ろしい秘密、十日程前に廊で吐いた濁つた血！ 極めて少量ではあつたが、略血には違ひなかつた。鈴蟲はその略血のことを夢物語にして、今咲尾だけに打ち明けようと思つたのだが——。

「やつぱりきいてたもるなえ！」

言ひもあえず、鈴蟲はよ／＼と泣き崩れてしまつた。

何時になう續けさまに咳が出た。袂で口を抑へて咳をこらへてゐると、息苦しい胸に、むか／＼と嘔きが來た。咳をするたびに、口にあつた懷紙が藍々と赤くよこれた。

「あゝ、血！ 血！」

第二の略血が來たのだつた。蒼白に變つた鈴蟲の頬。くら／＼と濃しい目まひが來た。咲尾は倒れやうとする鈴蟲の身體を支へてゐた。

黒味をおんだ血が、どく／＼と湧いて出た。

氣を失つた鈴蟲の口から、咲尾——、咲尾——、滅入るやうなこゑが洩れた。咲尾、このことだよ——、今の今、夢にこと寄せて打ち明けようとした略血の意識が、朦朧とした頭の中に残つてゐて、咲尾このことだつたのだよ——。明るい陽射の中に昏々と眠りながら、鈴蟲の唇は微かに動いてゐた。それが二三日前のことだつた。

それからといふもの、ずっと高い熱が續いてゐるのである。刻一刻、それこそ目に見えて身體は衰弱してゆくのであるが、これはまた反動に、神経はこゝろ憎いまでにいよく研えてくるのだつた。

日ねもす病床に就いてゐて、鈴蟲はいろいろなことを思つた。死んで逝くのだ——、とさとしてゐるだけに、何を捉へて來てもみんな悲しい思ひ出になつて行つた。

ひとしきり高い熱に襲はれたあとは、激しい疲労のためにとろ／＼とまどろむのだつたが、その度にさまざまの夢を見た。悲しい夢に泣いたり、恐ろしい夢に醒されたり——。

今も鈴蟲は夢を見てゐるのだつた。

「大きなお運！ 白い／＼お運だよ。ぼつかりと咲くのよ。今咲くのよ！」

「まあ！ 早うお目覚め下さりませや」

ぬぐうても抜ぐうても次々と湧いて出る泡のやうな汗。高い熱に目されて目覚めようともせぬ鈴虫の額を、侍女の咲尾は悲しく見凝めながら、

「早うお目覚め下さりませや——」

さう言つてゐるうちに霧がかゝつてしまつた。自分でも辨へぬ間に、涙が目一杯に溜つてゐるのだつた。

二

十日餘りがすぎ去つていつた。そしてたうとう最後の日——、建久元年十二月の三日が來たのである。

臨終の近づいたことを知つたのであらうか、この日、朝から侍女の咲尾に援けられて、鈴虫はさつぱりと衣服を代へた。枕も西に置き代へたし、稱名も口に出してはつきりと稱へた。日頃覺えた禮讃の一節を咏んだり、

「女人また救はる——、妾だとして、ひたすらにお細りすれば、きつときつと阿彌陀如來のご誓願には洩れますまい。俱に一處に會するとも覺えました。何といふ嬉しいこと——、何をお疑りなどいたしませう。ありがたいことにござります、ありがたいことにござります」

かねて耳にしてゐた數々の法談が、靜かな湖面を這つてゆく小波のやうに、鈴虫の腦裡をかすめてすぎた。

「即滅無量罪——、阿彌陀如來さま、どうぞ妾のつくり來ました罪がありますならば、いえ、つくりなした數々の罪をどうぞお許し下さりませ、そしてあなたの、結構なお淨土へお導き下さりませ」

一つの法談を浮べては、何度も何度も自分の心で呟き、呟いたあとには自分でも不思議なくらゐ、稱名が大きな聲になつて出るのだつた。室の中程に張つた綾織の几帳、几帳の内側を、更に金泥の屏風で隠した。これは松蟲のこゝろ遣りだつた。恰度二年、同じ小御所の部屋も隣なつた同じ館で、姉妹のやうに力になり合つて來た鈴虫と松蟲。苦樂も共に分け合ひ、どんな些細なことをでも、互に胸中を打ち明けて來た松蟲の、今はのこゝろ遣りだつた。

「大切な御臨終の場合、心が散亂してはなりません」

悲しさにはふり落ちる涙を拭はふともせず、松蟲は咲尾を促して、せめて今生の手向にと、千々に心を碎くのだつた。

文臺の上に白布をかけて念持佛を安置したり、紙燭を遠のけてあたりを仄かな明るさに包んだり——。

日没の頃から、鈴蟲は安らかに眠りはじめた。松蟲と咲尾とは、片時も枕邊を離れなかつた。

「ご臨終でござりませうか」

赤く泣き腫れた咲尾の目が、さう言つて松蟲を見やるのである。鈍い紙燭の灯にも、涙がきら／＼と銀色になつて落ちるのを、松蟲は咲尾の目に、咲尾は松蟲の目に見合つた。

松蟲は聲たてゝ泣きたかつた。自分の半身がもがれてゆくやうな思ひだつた。淋しいのではなく、頭から足の先まで徐々に鋸で挽かれるやうな苦痛だつた。大海原にたつた一つ残された小舟が、頼る燈を見失つたのも同じこと——、然もそれは、永遠に再び點らないだらう——逆まく怒濤のやうに、覆ひかむさる女房達の嫉視、醜い女ごゝろの暗闘！ 泣きながら、松蟲は薦たけた女房達の姿を、ちらつと眼前に描いて、またそれが悲しかつた。複雑な感情が込み上げて来て、

譯もなう泣けて来るのである。その目で鈴蟲の面を見てゐた。どれ程の刻が経つたらう。靜かに目を開いた鈴蟲は、病みつかれて細つた手首を、そつと松蟲の方に差し出して、上目づかひに松蟲を見るのだつた。松蟲は乗り出してその手首を自分の胸にあてがひ、兩手でしつかりと握つてから、徐ろに鈴蟲の胸へ送つてやつた。

「お胸の上でしつかりとお組み遊ばせ」

「はい」仰臥した胸の上で鈴蟲は兩手を合して、「松蟲さま、往生は一定でござりませう程に、お心易う思召して……」力ない聲に漸くさう言ひながら、ちつと上目を使ふのだつた。骨と皮ばかりに病み疲れてゐる顔ではあるが、しかし、それが却つて、ある氣高さを伴うてゐる蒼白な能面のやうに見えた。松蟲は薄暗い紙燭の灯の中で、しばらく黙々と見下してゐたが、咲尾は耐へきれずに欷り泣いた。

「泣いて下さるなえ、咲尾。そなたには長の年月、えらう面倒をおかけしました。懺忍して下されや」

「まあ、旦那さま、そのやうなことを——」

「いえ、懺忍して下されや。そして今はのお頼みをきいてたも。泣いて下さるなえ、泣いて下さるなえ。——あゝ、悦しや、有難や。お救ひの光明に乗つて、轉生の果を結ぶのも、早や一刻の後に迫りました。松蟲さま、このやうに安心





決定の思ひをするのも、みんな吉水上人（法然上人のこと）のお蔭。
ありがたうござります、有難うござります」

「ほんに鈴虫さま、ありがたいことにござりまするなあ、極悪の罪を
重ねた者も、穢れの多い女の身でも、お助けを信じてお縋り申す上か
らは、何で往生をし損ずるやうなことがありませうや。これまでに幾
度となう、吉水上人お直々の御説教を承はれましたことは、この時期
に生れ合せた果報、希うてもない幸でござりましたなあ」

「九品（九つの彌陀安養の世界）の何れに生きさせて頂か
るとも、この上の悦びはござりませぬ。なむあみだぶつ、なむ
あみだぶつ」稱へる念佛の聲も次第に細々と消えてゆくやう
である。光の弱い燭光も、深く垂れこめた悲しみの雰囲気
の中にあつて、消えんばかりの細さでゆら／＼と瞬いてゐる。
「松虫さま！」鈴虫は珠數のかゝつた細い蒼白な兩手を、胸
の上で改めて合しながら、「これで見苦しゆはござりません
か」力のない聲がとぎれとぎれに言ふのだつた。「もう妾で
は、はつきりと見えませぬもの……松虫さまも咲尾も随分と
ご健固で……今度は、今度は、彌陀のお浄土！」
「まあ、旦那さま！」

咲尾はもうおろ／＼と息で「お氣の弱いことを——」

「ほんに鈴虫さま、お氣をしつかりと……」松虫も傍から力
付けるやうに言つたが、自分の言葉に誘はれてわつと泣き崩
れてしまつた。長い思ひであつたとは言ふものゝ、自分達とは殆ど同
年の、また二十歳前後の若さで、早くもこの世を去らうとしてゐる鈴
虫のことを思ふと、兩女は、自分達も死んでゆきたい——、死別する
ことが悲しくて悲しくて胸をしめつけられるのだつた。

咲尾と松虫とは、口に念佛を稱へながら、今にも消え入らうとして
ゐる崇高な鈴虫の顔を見つゝ、新らしい白布に水をしまして、代るが
はる色褪せた唇を濡してやるのだつた。（續く）

均合の取れた人間



渡邊 順

ドイツと日本とは國情が違ふから、ドイツではかうなのに日本では左様でないと云うて慨嘆するには當るまい。しかし、ドイツでやつて居ることと尤もなことがあれば、これは我らも大いに取入れてよろしからう。何もドイツに限つた譯ではなく、フランスでもアメリカでもかまはない。要はわが國民の、全體としての發展、全體としての向上といふことだ。

さて、この頃ドイツ人の云うてゐることを聞く機會があつて、鳥渡聽いて見るになかなか面白い。その中で彼等が、平均といふこと、均合の取れた人間といふことを云うて居るのが取りわけて面白いと思つた。かう云う話である。

例へば私のところへ客がある。そして私と客とは何か用談を爲してゐる。ところで、私のそばに私の子供が居つて、それも七つか十のごく小さい子供だが、それが夢中になつて積木か何かを遊んで居る。私共大人の要談は、この私の子供には丸で無關係だ。

ところが、どうかしたハズミに、大人の言葉の斷片の一つが子供の耳に留まつて、それがこの子供の記憶範圍、理解範圍内の言葉である、いきなり子供がそれに取りついて來て、解りもせぬ大人の會話の間へ片言の嘴を入れるのである。そこで私は、その場でこの子供を叱るなり、又は後で、あれは子供の知つたことではないのだから、大人が相談事をして居る時は、子供は黙つて居らねばいかぬのだと云うて説教をして聞かせたりする。いはゞ之は生きた家庭

教育の一つであつて、元來さうあつて然るべきことである。

ところが、このドイツ人の云うに、之は尤もな話ではあるが、そこにまた缺陷がなくはない。と云うのは、元來この子供には、神經反應の敏感な素質があるのであつて、その素質のために、直ぐに大人の言葉に反應を示したのである。之を正しく矯めるはよいが、それをそのまゝにすると、子供の多方面な反應能力を遮閉してしまつて、終には之を一面的にすると云ふのである。

一面的といふことも、必ずしも悪いことではない。何か大事を爲さうとするものは、他事に氣を外らさず、當の目標に全身全靈を集中せねばならぬ。集中してさへなほ且つ成功費束ないことも多々あるのだから、集中といふことは良いことなのだけれども、そのため氣づくべきことにも氣づかぬやうになつては、滑稽ともなり、時には悲劇ともなるといふのである。

新規の會社員が會社へ勤めに出る。机が窓

ぎはにあつて外は賑かな大通りだとする。するとこの若者は、とかく窓の下へ氣を取られ勝ちだ。若い婦人も通れば、チンドン屋も通る。以つて、とかく事務が滞滞し勝ちだといふことになる。所が、幸ひ彼がおのれの煩悩を殺し去つて、一心不乱に帳簿に啣りつくやうな癖を仕上げた際、地震とか火事とか、乃至は事務上の鳥渡した事故で、今少し心持に餘裕がありさへしたら氣づいた筈のことを、折角の一心不乱のため却つて氣づかずにしまふことがあり得る。さうしてそこからして、様々な悲慘事や滑稽事が生まれるといふのである。だからして、集中、一心不乱といふは良いことであるけれども、同時にそこに餘裕、餘地といふものがなくては叶はぬ。無駄に氣を散らすは悪いことであるけれども、多少は心を遊ばせるゆとりを持つて居らねばならぬ。幼兒、青少年の教育に携はるものは、この間の微妙な消息に通じて居らぬと、角を矯めて牛を殺すやうな破目に落ち兼ねぬと云ふのが右のドイツ人の言葉であつた。

それにつき彼はかういふ事を云うて居る。體育とかスポーツとかをやかましく云うは必要なことで、何というても身體強壯な人間が第一である。それだから、運動場や競技場をつくるとか、様々な體育設備をしつらへるとかすることに相當の金をかけねばならぬが、この體育といふことが、當の人間の異なるにつれてやり方が異らねば、決して良い結果は生れぬといふのである。

そこでドイツ人は、色々に考へた末かういふ試みをやつて居る。例へばこゝに鑄物工場があるとする。鑄物工といふものは、日本でもさうだが、世界を通じて強いものである。力仕事が強いから、自然人間も鈍重になる。だが同時に、熔解した鐵や鉛を扱ふのだから、鈍重な中にも微妙なすばやさ、鋭いカン、頃合をはかつてやる早業が必要である。だからして、一方では重いものを持運ぶ強い肩の力、腰の力が必要であり、同時に他方では神經の敏感な反應と共に、腕、腰、脚のしなやかな彈力が必要である。

ところで、鑄物工を競技に出すと、とにかく重闘技をやりたいがる。砲丸投げ、ハンマー投げ、さういふ力業では他の産業の労働者に引けを取らぬからして、さういふ競技で天晴れなところを見せようとする。決して棒高飛だの、四百メートルリレーだのと云ふものをやりたがらぬ。また稀にそれをやるものがあったりても、さういふのに限って十人並すぐれた鑄物工とは云へぬ手合が多い。これでは、折角運動をやつても、平素使ひてゐる筋肉をときほぐし、平素使はぬ筋肉を充分屈伸させて、肉體機能の均合の取れた發達を計るわけには行かぬ。そこで彼等は、かういふことを考へたのである。

こゝに假りに四百メートル走路をつくるとする。するとそこへ、鑄物工場に必ず轉つてゐるやうな道具や品物をまんべんなく轉がして置くのである。それから競技者には各自に鑄物用の柄杓を持たせる。そしてその中へ溶けた鉛を注ぎ、その上へ水をすこし入れ、この水をこぼさずに、四百メートルを出来るだ

け早く鉛を運ぶといふ複雑な競技をやらせるのである。

かうすれば、腕つぶしが強いといふだけ、脚が速いといふだけ、氣轉が利くといふだけ、かういふ一面的にすぐれた點があるだけでは競技に勝つといふわけに行かぬ。すべてにつき平均にすぐれたものが勝つわけである。

ドイツでも、之をどこまで實行してゐるかは分らぬが、とにかくかういふ點に氣がついて、搜せた韋駄天ばかりでなく、均合の取れた人間を労働者の間からも一般的に育てようとしてゐるらしく見えるが、これなどは、わが日本でも、大いに見習うて良いことではあるまいか。

今日は日本でも、國民體位の向上といふことは、なか／＼眞剣なこととして考へられて居る。軍人や學生は無論のこと、労働者、勤め人、農民に至るまで、色々の體育機關を設けたり、ラヂオ體操の實行をやつて居つたりする。しかしよく／＼實際について檢べて見ると、ラヂオ體操一つを採つて見ても、小學

生などには好都合かも知れぬが、その他の大人の世界に對しては、餘りに一律的に出來て居つて不便が尠くない。

今から植付が始まり、之から暑い夏中、草とり、なか打ちと續く農村の労働を考へても炭坑や金屬鑛山の労働を考へて見ても「全國の皆さま、お早うございます。」で始まるラヂオ體操は、大分縁が遠くはあるまいか。呼吸運動は良いことである。しかし人絹工場の中で、御承知の如く、人絹工場は生産行程の必要上かなり嚴重に閉鎖してあるが、あのなかで深呼吸をすることは、からだに悪くはあつても決して良いことはない。

かういふ事情をよく考へて、國民を形づくる人々の様々な集團、さまざまな場面、さまざまな條件に應じた體育方法を編み出すことが必要である。

右に言うたことは、たゞ體育方面のことに限つてあるが、精神の方面も全く同様であらう。餘裕を持つといふ言葉は消極的にひびくかも知れぬが、このせち辛い世の中を渡りつ

つ、不斷に心に餘裕を持つといふことは、餘裕積極的な心構へで居らねば出来ぬことである。それだから、心に餘裕を持つといふことを、隱居風な餘裕と取らず、二六時中眼まぐろしく働いて居る働き手の持つ心の餘裕と考へねばならぬ。甲が甲と決まつたからと云うて、それから後は乙には眼が行かぬといふのでは、當座はよいかも知れぬが將來必ず困つて来るのである。

政治家のいふやうに、一汁一菜主義を採用するのも悪くはなからう。然しその際、充分

營養の取れる一汁一菜といふことを考へる必要があり、また食事といふものは、たと舌にのせて齒で噛みさへすれば良いといふものでもないのだから、見た眼にもうまさうに調理するといふことも忘れてはなるまい。

さうでなくては、人間が機械のやうになつてしまふのである。貯金にしても同じ譯合である。貯金といはれ、ば溜めることばかり考へ、溜めたものを人間らしく使ふことを忘れるやうでは、人間が貯金をするのでなく貯金箱が貯金をするやうなことになる兼ねまい。

どれ程金があり、どれ程機械が豊富にあつても、肝腎の人間が貧弱では所詮ものゝ役に立たぬ次第だから、常に精神上にも肉體上にも餘裕を持ち、均合の取れた人間として進んで行くのでなければならぬ。目下のわが國民はかなり緊張してゐるらしく見えるが、どうかした拍子に飛んだ隙の見えるのは、緊張一天張りでのぼせ上つてしまひ、眼を廣く配つた餘裕の心持ち、問題を出された時、裏も表も、自分の眼でよく／＼檢べて見る氣力に缺ける所あるためではなからうか。

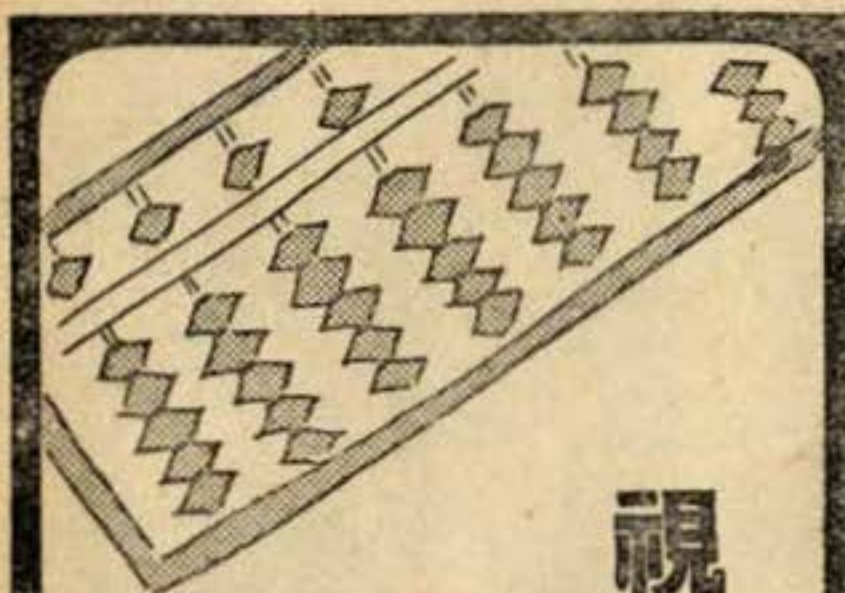
視力經濟學

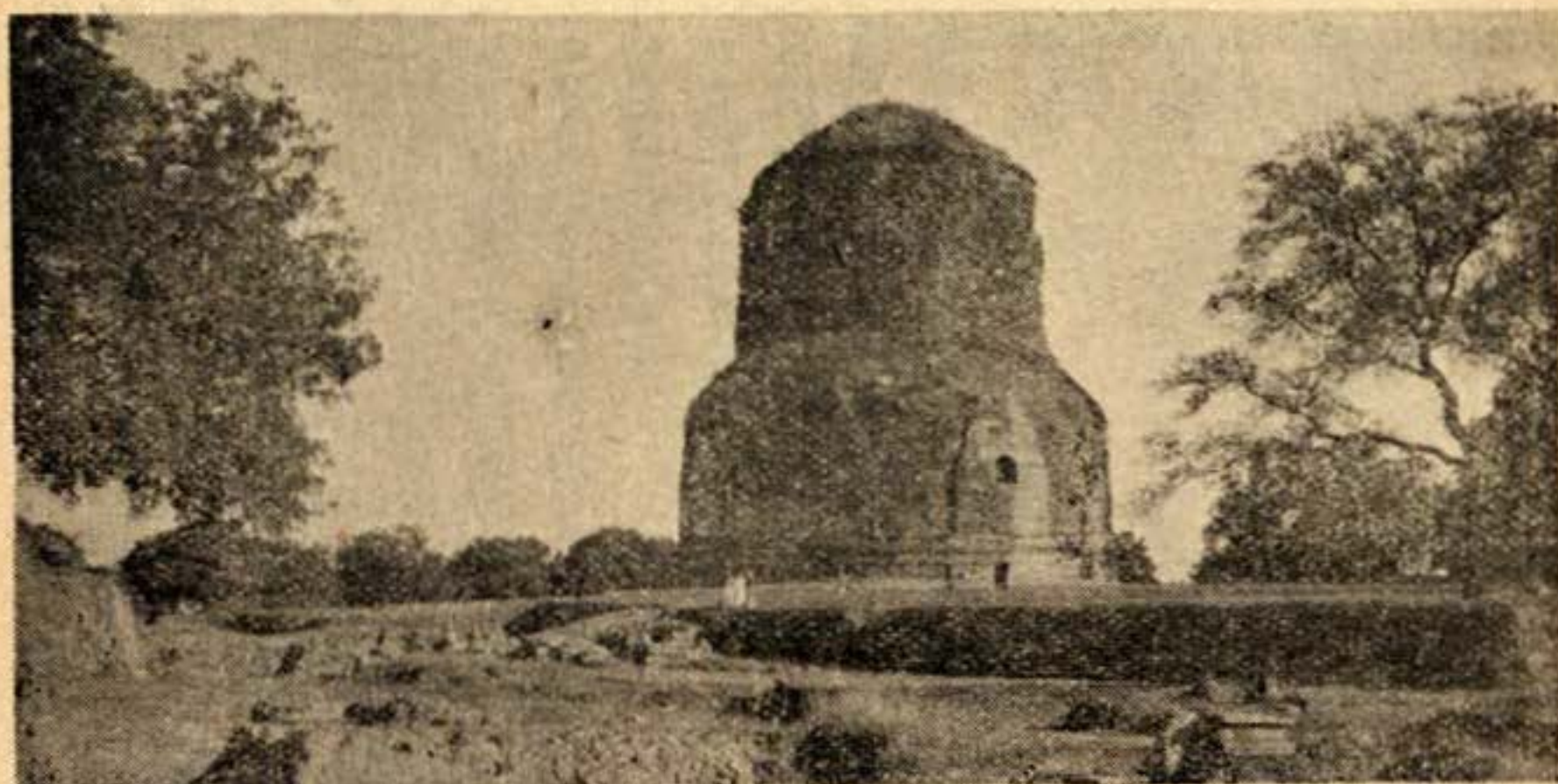
消費のある處、供給がなくてはならぬ。需要と供給のバランスを保つ處に、經濟の根柢がある。處で物資の需給は圓滑に行つてゐる今日でも、體力の需給は果して完全だらうか、否、むしろ消費一點張りで、充分の供給が行はれて

ゐない事實がある。その最も顯著な一例が視力の問題である。讀書だ、執務だ、創作だ、シネマだ、觀劇だと吾々は朝から夜中まで視力の濫費をやつてゐるが、眼に休養と手當を與へることは忘れ過ぎてゐる。結果は近視眼の増加であり、眼疾の流行となつて現はれてゐる。

視力を經濟的に消費することは健康への第一條件である。眼が疲れたら、充血を起したら、眼疾に犯されぬ裡に早速眼科藥スマイルを點眼する位の常識は何人にも要求したい處だ。其處に能率の躍進と生活の明朗性が生れる。

因に眼科藥スマイルの定價は二十五錢・四十五錢で全國藥店百貨店藥品部に販賣





塔婆の話

浄土宗教學部長

江 藤 澂 英

塔！ 何と崇高なしかも神秘に富んだ象徴であらう。寧樂、平安の古都は云ふまでもなく、東都の周圍にあつても、不忍池畔、上野の杜に隱見する寛永寺の塔頭、芝園橋畔、三縁山の翠樹の間に聳ゆる増上寺の五重塔など、奇しくも景趣を淨化してゐる。

塔！ たしかにそれは佛法の興隆を如實に物語る大地の莊嚴である。雲表に聳ゆる五重、三重の層塔が佛教藝術の精華たるは云ふまでもなく、佛舍利を奉納した精巧な舍利塔、或はかの孝謙帝が御追福の百萬塔、五穀豐饒を祈つた穀塔、さては小さな坭塔、その他寶篋印陀羅尼を納めた寶篋印塔など、何れも懐しくも尊いものである。

塔(婆)は略稱で、梵語の *stupa* のことで、漢語では塔婆、卒塔婆、數斗婆、私偷婆、蘇偷婆などいろ／＼に書かれてゐる。譯名にも方墳、圓塚、歸宗、高顯、聚相、滅罪生善處など澤山ある。最初は佛骨や經卷などを埋藏し、または特に靈地であることを標示するために設けたもので、塔のことを亦た佛舍利處とも靈廟とも云うてゐる。

塔は印度、支那、日本と佛法の流行と共に旺んに造立せられた。今その興廢の史實や、美術建築上の鑑賞や研究は暫く措くが、一言に塔と稱する中には、その目的と形狀とに依

て多くの種類がある。例へば靈域を表すため佛舍利を納むるため、供養のため、墓標として作るなどで、層塔、石塔、坭塔、五輪塔、板塔婆、板碑等一々枚舉に遑がない。しかし今日吾々が日常に塔婆と云ひ慣してゐるのは、殆ど板塔婆を指すので、先亡追善のために施餓鬼に、年回法要には板塔婆を建てる。殊にお盆の展墓には經木塔婆が必ずつきものになつてゐる。大阪の四天王寺や京都の東寺など、彼岸詣でに、お盆参りに群参が押し合つて小さい經木塔婆に法名を書いて貰つてゐるのを見受ける。昨冬、上海の閘北から江南の新戰場を訪ねた時、彼方此方に白木の塔婆が立てられて、皇軍將兵の亡き跡が弔はれてゐたのは今に忘れ得ぬ光景である。(下段寫眞は舍利塔)

◇ お盆の月に因み今時一般の寺院で用ゐられてゐる、板塔婆について二三の挿話を拾つて見る。塔婆はもとは眞言宗に據るもので、五輪の塔は方形、圓形、三角形、半圓形、如意寶珠形の五輪は、順々に地水火風空の五大を

標示するものとして、普通これを表すために五大の種類を梵字を書き、またこの五輪を膝腹、胸、面、頂の五に配して自性法身の佛體の表象としてゐる。これ等の委しいことは弘法大師の秘藏記や、興教大師の五輪九字秘釋などの書物に明してある。而してその功德に

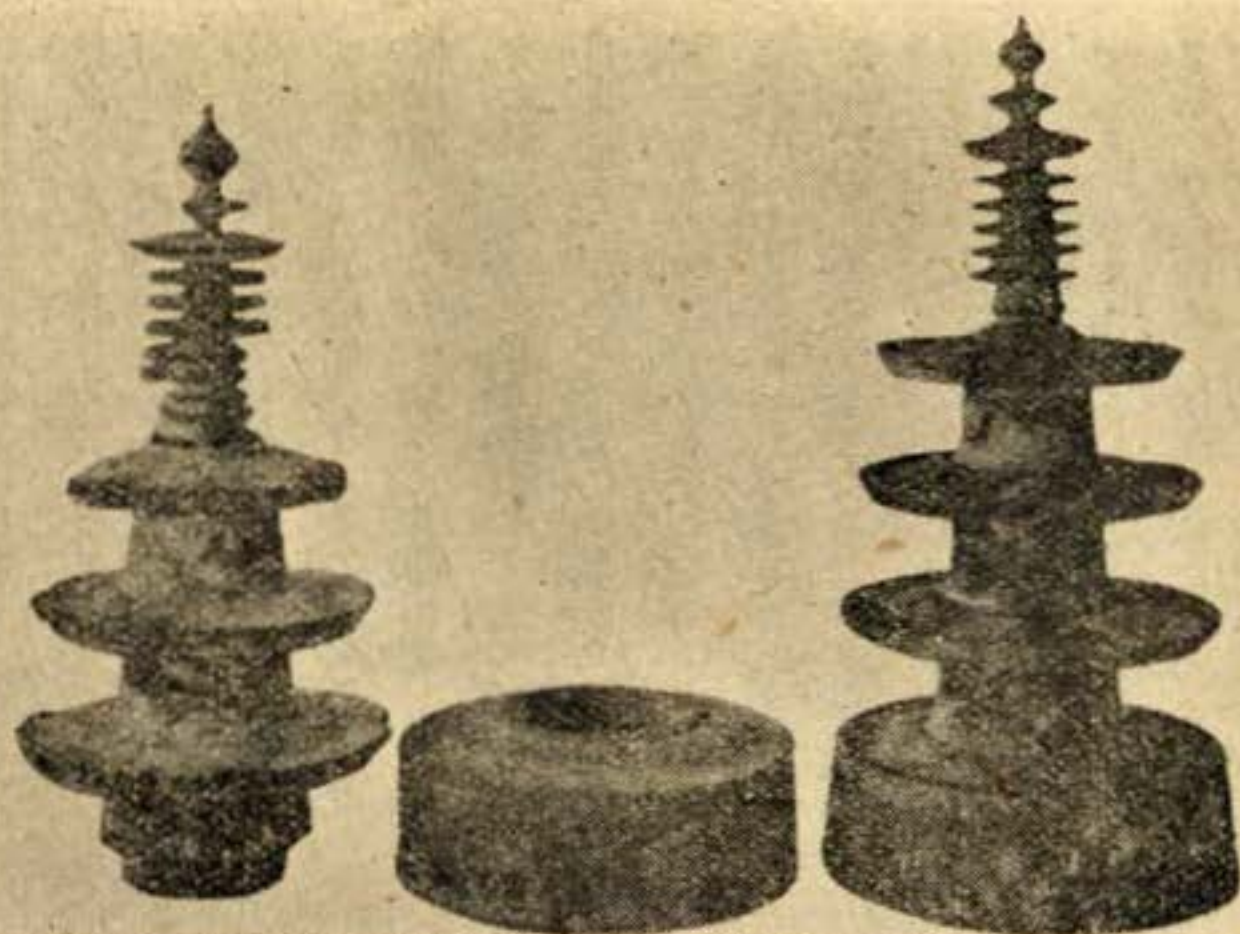


ついてはやはり興教大師の著である日卒塔婆鈔に、卒塔婆は大日遍照の一身、十方諸佛の具體で、造立供養の功德は無量無邊であると、要略して十種の解釋をなしてある。その名目だけを列ねてみると、(一)大日如來や十方諸佛を造立供養することになる。(二)密嚴華藏

並に十方諸佛の淨土を建立供養することになる。(三)十方諸佛の法身生身舍利塔を建立供養することになる。(四)諸佛の精舎を建立することになる。(五)普く十方三世顯密大小一切の佛法を流布することになる。(六)一切衆生を利益し廣く六度萬行を修することになる。(七)四魔退散し衆惡消滅す。(八)無量の功德無邊の善根自然に圓滿す。(九)十方淨土願に隨つて往生す。(十)順に三妄を斷じ速かに五智を證す。斯様に塔婆の建立と供養は小因大果の要門で、功德益廣の秘術であると云はれる。

◇ 諸佛諸尊の形體である卒塔婆は、これを恭敬頂禮すべきことは言を俟たぬ。尾張八事山の諦忍律師の卒塔婆用意鈔や、京都二條專念寺佛定上人の蓮門住持訓の附録などには、塔婆に關する用意が懇切に教へてある。續鑑石集にこんな話が書いてある。昔、備後のある寺に慳貪放逸な僧があつた、檀家から塔婆を持参すると、長ければ切り捨て、縁の脚として、風呂の薪にしたりするのが常であつた。

これは佛身を損傷するもので五逆罪の一に相當するものだ。この僧がこの惡行の罪で頸に繩が出来、浮腫して膿血が流れ、臭穢不淨



なること言語に絶し、藥石寸効もなく、遂に蕤蠅が飛び出し、頸骨腐爛して悶死したとのことである。また因果物語に、尾州知多郡の天外長老の知己の弟子が、七本塔婆を粗略に書いて立てたところ、住持の夢枕に亡者が現れて、「家が弱くて風雨に堪へられぬから丈夫にしてくれ」と懇請するので、翌朝墓所に行つて見ると、果せるかな塔婆の文字が粗略であるばかりでなく、亂雑に立てられてゐたとのことである。心すべきことである。

◇

塔婆や經木の古いのは、つい不知不識に粗略に扱ひ勝ちになるが、最も慚愧すべきことである。塔婆が墓場の離になつてゐたり、經木が籠の下に投げ込まれたり、更に甚だしきは板鋪の破損の補修にされたり、陀羅尼や經文の反古か壁の腰張りにされたり、塵埃捨場に投入されてをるなどがある。何れも恐るべき罪科で戒愼を要すべきことである。然らば如何にすべきかと云ふに、清淨の地に埋むとか、或は濟度衆生の大悲心を以て河海に流す

とか、池中に投じて水中有情の罪亡しにするがよいと教へてあるが、慈悲心もなく徒らに河や海に流すことも考へものである。今度淨土宗の法式差定の中に、新たに淨焚式といふのが設けられたが、これは一定の淨地で焚燒するのである。(上段寫眞は法隆寺百萬塔)

◇

これについて想起するのは、乞食と云はれた桃水和尚の行業である。彼がまだ二十歳頃のころである、江戸の吉祥寺に掛錫中のこと下谷の某寺では板の塔婆を幾百枚ともなく立てめぐらして寺境の垣としてゐたが、下僕が菜園の糞尿をそれに打ちかけるのを見て、毎



も桃水和尚はこれを苦々しいことに思ひ、自分の施物があり次第、街に出で、板をかうて来て、卒塔婆と取り換へては垣に差し、塔婆は自ら隅田の川べりへ持つて行つて、懇ろに回向をして流したといふ。いかにも桃水和尚の尊い出家相が拜せられて、低頭合掌せしめられる。(前段寫眞は談山神社十三重塔)

かうした物語りは澤山に傳へられてあるが要するに塔婆は佛様の御形相であるから、佛身に對すると同様に心得べきである。塔婆を書くには手蹟の巧拙よりも、筆畫を正確に町重であるべきだ。また墨汁をして他を汚したり、脱字誤字があつてはならぬ。また用材も無疵なものを選ぶべきで、節穴があつたり、損傷してゐてはならず、書く時は必ず法衣を着して書き、書き終つたら新しい佛體が一驅造立されたのであるから必ず開眼を要するのである。淨土宗であれば十遍の念佛で足りるのであるから忘れてはならぬ。

尚これは淨土宗だけの話であるが、淨土宗で塔婆を建てる意味はどうかと云へば、無量壽經の中には明かに「起立塔像」が説いてあるので、これに相當するのであるが、専修一向の念佛を以て宗意とする立場からは、造塔の如きは雜行ではないかと云ふ疑問も生ずるのであるが、念佛と造塔とを一往廢立にあてゝ論ずると、念佛は立のために説かれ、起立塔像は廢のために説かれたもので、これは所廢の行となるのである。しかし起立塔像の塔の意味



は廣く、佛身を造立すること含まれてをり、阿彌陀佛の御像を造立するとすれば、それは雜行ではなく正行である。然れば助正分別を

すれば、起立塔像は念佛の助業となる理である。故に卒塔婆は本眞言家に據るから、五輪には必ず梵字を書かねばならぬなど、物識り顔に云ふ人もあるが、淨土宗の立場から云へば、餘佛の像を造立するのでなく、阿彌陀佛の像を造立するのであるから、五輪に「南無阿彌陀佛」と書いて、阿彌陀如來の佛身として、至心に禮拜供養すべきであり、それでこそ造立塔婆も正行の一として念佛の助業たるのである。(上段寫眞は般若寺古塔)

經には童子の遊戲に砂を盛つて塔を造るも皆佛道を成ずる因となるとある。況や父母兄弟の恩を報ぜんとして、思ひを凝らして不朽に傳ふべく建立せし墓碑石塔、先亡追慕の懇志より佛身に擬して造立する塔婆經木など、その至誠は云ふまでもない。殊に本年の盂蘭盆には新佛として、幾多名譽ある戦死者の英靈も祭られることであらう。一基の塔婆建立にも、能所共に如法に供養奉仕すべきであらう。



凡人凡悟

吉田 絃二郎

數年前歌舞伎座でわたくしの芝居を上演したをりのことである。舞臺に郭公を鳴かせる必要があつたので、その係りの音樂部の人たちに相談したが、郭公を聴いた人がないので困つたことがある。そこでわたくしが郭公の聲の説明をして、ともかく舞臺にかけて見たが、一般の見物には不自然でも何でもないやうに感じられてゐるやうに見受けられたが、わたくしには如何にも不自然におもはれてならぬので、二日ばかりで郭公の聲は止してしまつた。口では郭公といふ、すなはち同じ結果に終つてしまつた。口では郭公といふ、すなはちquackoと發音すればいゝやうなものの、なか／＼郭公の聲は出ない。

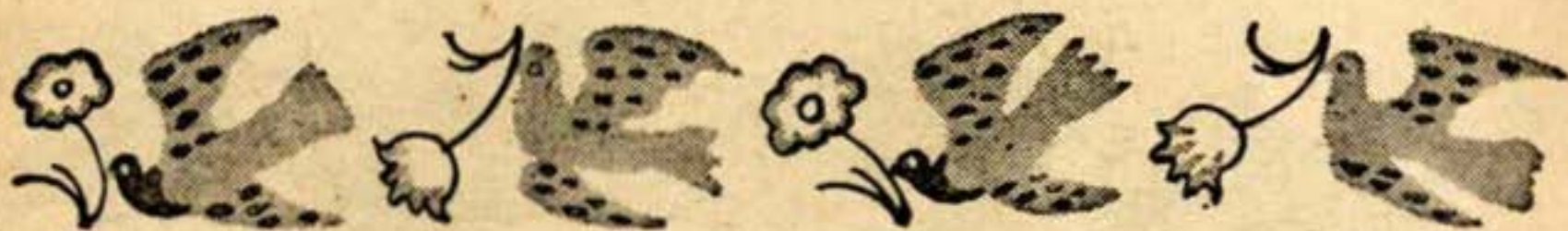
いつたい都會の人たちはたいいは草木や鳥獸についてはきはめて貧弱な知識しか持ち合せてゐない。郭公はこのご

ろ、冷つこい風の吹く日、武藏野に出て一日も森を歩いてゐればたいいて聴くことができるが、それさへ東京の人は一度も聴いたことがないといふ人が多い。

三光鳥はこのごろでは朝から夕暮までわたくしの家の周囲で鳴いてゐる。郭公は今年はまだ一度しか聴かない。

このことを東京の人に話して聞かせても、その三光鳥や郭公が武藏野の家の周囲の森で鳴いてゐるといふことをさへ疑ふ人がある。

佛とは何ぞや。西方淨土とは何ぞや。といふ問題が常にわたくしたちの第一義的な問題となつて来る。そこでわたくしは郭公や三光鳥の話を持ち出すのであるが、わたくしの家ちかく森の中に郭公が鳴き、三光鳥が啼くといふことをさへ疑ふ人があるくらゐだから、佛や西方淨土といふことを説いた



ところで疑ふ人のあるのは當然なことである。

わたくしは郭公の鳴き聲や、鳩の鳴き聲を手供のころから聞き覚えてゐる。そしてそれを樂屋の専門家に説いて聞かせる。しかしそれでもほんたうな郭公の聲は傳へることはできない。いはんや佛、西方淨土といふやうなことは提示しようとしても、説明しようとしてもできるものではない。要はわたくしたち自身が自分でそれを観、それを感じるより他に方法はない。

「わたくしの家にこのごろは朝早くから三光鳥が鳴いてゐる」と言ふわたくしの言葉を信じて、武藏野のわたくしの家まで三光鳥を聴きに來る人はつひに三光鳥の聲を聴くことができる。身親しく三光鳥の聲を経験することができ。

「三光鳥など鳴くものか」といつてわたくしの言葉を疑ふ人は永久に三光鳥の聲を聴くことはできない。

郭公を聴くためには、わたくしの家を訪ねただけでは駄目であるかも知れない。一日或ひは數日靜かな武藏野を歩いて見なければならぬ。それでも駄目であるかも知れない。さらに相模の山、信濃の山まで行けば必ず聴くことができる。それには先達である者、道案内者の言葉を聴くべきである。

佛、西方淨土の聲を聴くためには命を賭け、一生をさへげて苦しみ、精進しなければならぬ。疑ふ者はつひに佛をも西

方淨土をも觀することはできない。

たゞ一度わたくしの家を訪ねただけで三光鳥の聲を聴いた人もある。因縁が熟したのだ。

五度六度來てなき聲を聴かない人もある。因縁が熟さないのだ。しかし三光鳥は必ず鳴いてゐる。

體當りといふ言葉は宗教の場合にもびつたり宛てはまる。小股すくひのやうな技巧を弄んでゐる間は眞の姿は隠まれぬ。一切が然らずんば無の體當りでかゝるべきである。命を投げ出してかゝるべきである。

釋尊の言葉に對して身命を抛つてかゝるべきである。一切を棄てゝ信すべきである。

キリスト教界にしてもたとへば合理的といふ考からキリストの復活といふやうな言葉を譬喩的な言ひ表はし方として説く人たちがあつた。しかしこれはキリスト教の自殺である。内村鑑三先生はキリストの復活を信じてをられた。わたくしは内村先生の信仰を尊敬する。内村先生が數度明治神宮外苑の日本青年館で説教をされたことがある。聴衆はいつも堂に溢れる盛況であつたといふから二千近い人が集まつたことゝ思はれる。しかもその説教がすんで、聴衆が立つた後には一片の紙切れも落ちてゐず、椅子は悉くきちんと腰掛を掲げてあつたといふことである。キリストの復活を信じてゐた内



村先生の信仰の力である。これは合理的キリスト教を説く人
人に到底望むことのできないことである。

宗教は知識ではない。言葉ではない。命そのものである。

人間そのものである。魂の體當りである。

西方淨土を譬喩だと説くやうな人には淨土はない。佛もな
い。

郭公は鳴かないと思つてゐる人には、武藏野に近く住んで
ゐても郭公を聞くことはできない。佛を信じない人、淨土を
信じない人は佛の御手に抱かれてゐても佛を観ることはでき
ない。

佛は夜も晝もわたくしたちの前に在すであらう。

わたくしの家の周囲は一面の竹林であり、嵯峨あたりの竹
山を聯想させる。このごろは竹の子も家の軒よりも高く老い
て、一つ一つの節を包んでゐる竹の皮の先端からかなり大き
な露を落す。竹の根から水を吸ひ上げて、それを枝先からふ
たふび土の上に落すものらしい。その露の落ちる音を夜更け
て聞けば靜かに歩み寄る佛たちの尊い聲音のやうにさへ聞え
る。わたくしは夜ひとり枕邊ちかく竹の露の音を聴くのをあ
りがたいことに思つてゐる。

ともすれば竹の露の音と聴くことのできぬ夜がある。翌朝
起きて竹山を覗いて見るといつの間にか根元に積つた晝の葉

を掃き捨てゝある。竹の露は根元に積る晝の葉に落ちてはじ
めて尊い佛の聲音を聞かしてくる。

竹の根元の晝の葉を捨てゝはいけない。露の音を聴くため
には晝の葉を落ちたるまゝにして置かなければならぬ。わた
くしたちの身命を大地に投げ棄てたまゝにして置けば天上の
露の音を聴くことができるであらう。

×

×

いよいよ梅雨に入つた。わたくしは終日たゞひとり、荒れ
たるまゝの庭を眺めてゐる。應接間に行き、茶の間に行き座
敷に行つて人の面影をもとめても誰もゐない。倉に入り、二
階に上り、さらに離房を探し、竹山を歩いて見ても誰もゐな
い。人の背程に伸びた裏庭の萱の中に突つ立つてぼんやり雨
雲を眺めてゐることもある。天涯孤獨の身のわびしさをしみ
じみと味ふ。背骨もくだけさうだ。わたくしは不圖そこに轉
がつてゐる石塊を見る。草を見る。すべてが孤獨だ。しかし
同時に孤獨の寂しさとともに尊さをも感じる。涙も涸れ盡す
ほどに泣いた果の小さな悟りであらうか。この人生の中で最
も尊いものは骨を削る程の苦しきの裡にのみ在るのであらう
か。さすれば尊さを知らず、悲しさを知らなかつた昔がなつ
かしい。刹那にわたくしは凡夫の迷に陥ちる。靜かに草に臥
して顔を掩ふ。



一頁評論

貯蓄の奨励

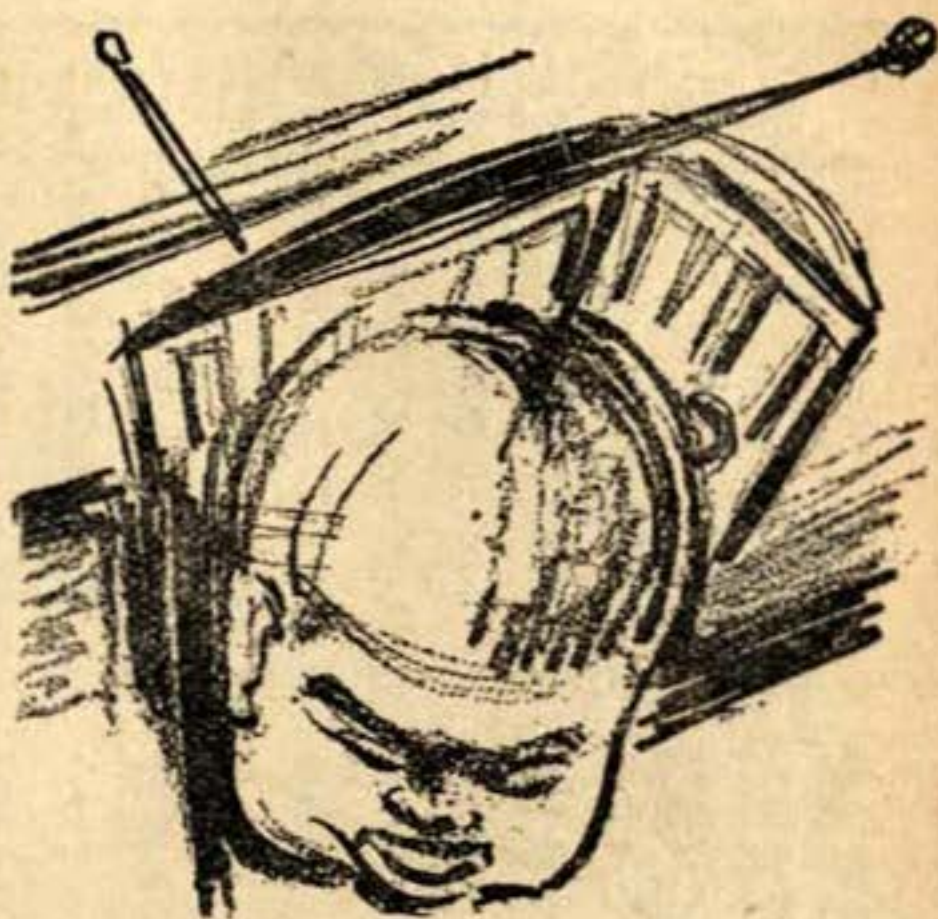
近代戦は莫大な金と物を消耗する。今度の事變でも去年から通算して約七十四億萬圓といふ尨大な軍事費が計上されてゐる。これは日露戦争の戦費二十億圓の三倍以上といふのだから一寸驚かさる。そこでこの戦費を一體どこから出して行くかといふことが當然問題になる。ところが日清、日露の當時と違つて外國から借金をして戦費を調達するといふ譯にはいかななくなつてゐる。どうしても國民の力で負擔せねばならぬ。その方法として國債の發行が一番重要なこととされてゐる。この發行必要額が約五十億圓である。この外軍需工業の生産力を

擴張するための費用が約三十億圓許り必要である。そこでこの發行される公債を順序よく消化し、又缺くべからざる生産力の擴張資金を圓滑に供給するため、どうしても八十億圓程度の貯蓄がこの一ケ年間に必要になるのである。もしも國民がこの八十億圓の貯蓄をしなかつた場合にはどうなるか。これが解れば貯蓄必要の理窟も解る譯だ。先づ國民一般が貯蓄しないと、公債の發行も生産力の擴充も圓滑に行はれないのは明瞭だが、もつとつき詰めて考へてみると、次のやうになる。今年公債として五十億の金が國家から民間に撒布されるが、これを受取つた一部の人が即ち今好景氣に恵まれてゐる時局關係の軍需工業方面の人々が、これを全部日常の消費生活に費すとする。すると爲替管理を行つて、軍需以外の

日常物資の輸入を極度に切りつめてゐる今日であるから、勢ひ日常物資の供給は不足するがこれに對して需要が大きくなり、その間のバランスが破れて非常な物價騰貴になつてくる。のみならず恐るべき悪性インフレーションを引き起すことにもなるのである。悪性インフレーションの害悪がどんなものは世界大戦後のドイツの例を見ればよく解る。かうした譯で物資や勞働を政府に供給して數十億の金を受取る人々はこの増えた收入だけを貯蓄するのである。貯蓄すれば再び政府に還流してゆくのである。そこで從來より餘計消費するどころか、個人的な消費は出来る限り、節約し、平和産業の力を軍需工業に廻すといふのが國策なのである。

だが一體八十億の貯蓄は出来る話かどうかと疑問を持たれる人もあらう。これは國民全部が協力すれば絶対に出来ないものではない。といふのは、普通の年に日本全國で約三十億圓の貯蓄が増加するのである。だからこれは今年の政府支拂分五十億圓がそつくり貯蓄されれば八十億圓は大丈夫といふことになる。

右のやうな譯で全國民はこれまで位の貯蓄は勿論今後も續けてゆく。更らに事變で收入の増えた人は増えただけを貯蓄する。しかしこれは國民の一部だからこれだけで八十億に達するのは難しい。そこで別に收入の増えない人々も生活に餘裕のある限り貯蓄を行はねばならぬ。貯蓄の方法は別に定まつてゐる譯ではない。郵便貯金、銀行預金、公債購入何んでもよいのである。要はこの貯蓄運動が事變下の戦時財政經濟成否の鍵であることはつきりと認識することである。



小 説
小 さ な 世 相

一 瀬 直 行

日のくれ方の南千住行の電車はいつも斯う云ふ人々で一つばいであつた。

職工、土工、それに行商人等が一日の仕事を終り、この頃の電車で家途に急ぐ。膝と膝をつぼめ肩と肩をつぼめ合つて席を譲り合ひ疲れた體を車體に委ね、吊革にぶらさがつた人々も大儀さうにして席のあくのを待つた。

が大抵は雷門を過ぎ終點に近くならなければ、つまり山谷、泪橋と來なければ車内はすかなかつた。

窓硝子に頭をのけぞらし口をあけて寝てゐる老人、そのわきには若い人夫が手拭の鉢巻をしたまゝ、二日前の古新聞を讀みふけり、

その隣席には商賣用の竹籠を車掌臺の隅に置いて、髪には汚れた手拭を被り脚絆ばきの柏我孫子方面から毎日市中へ出て來る乾物類の行商人、氣のよきさうな中年の日にやけた女がかけてゐると云ふ風に、いつもこの頃になると、車内全體には醬油の匂ひと汗の匂ひと體臭がみちみちてゐた。

疲れた體の乗客は誰も電車の走るのがのろくさくぢれつたさうにしてゐる。電車は満員の赤札を下げると安全地帯に澤山の乗客を残して走つた。女車掌は超満員の客の間に黄色

い聲をしぼり、運転手も車掌もことごとく荒つぽくぞんざいであつた。

正吉は車掌臺の近くの席に大人のやうに二本の足をぶらさげ腰をかけてゐた。その隣には彼の母が末の忠吉を膝にのせ腰かけてゐた。忠吉だけは暫らくふりに乗つた電車が面白く楽しく母の膝の上ではしやいでゐた。叔母の病氣見舞に連れていつてもらひ、窮屈な思ひと、思ひがけぬ氣づかひとに、がっかりした正吉はむつゝり黙つてゐた。母も正吉以上にも似合はずむつゝりしてゐるばかりでなく、險しい顔をして、膝の上に一人騒ぐ忠吉を煩さがつた。

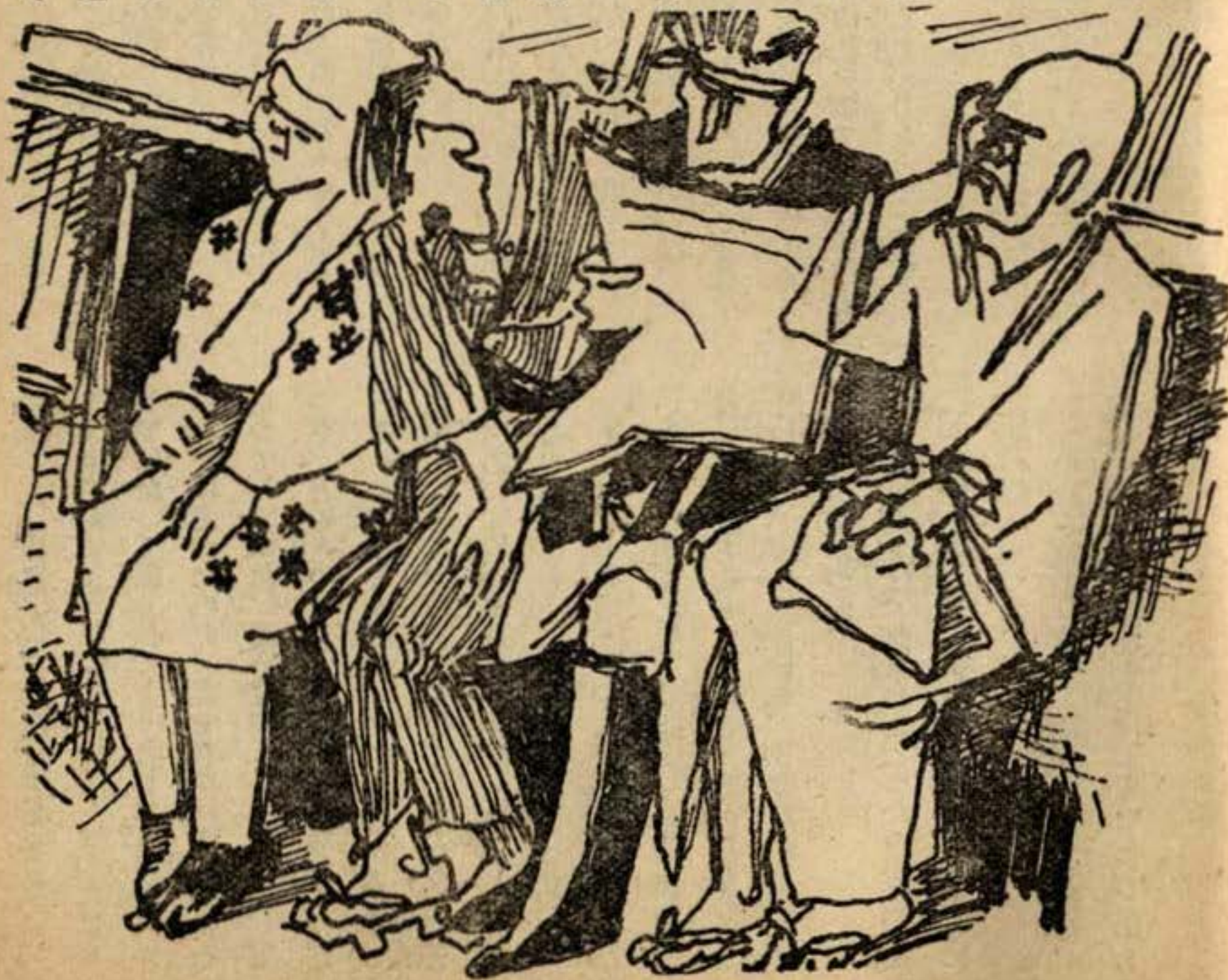
叔母の家から色々澤山もらひ物をして、そ

の風呂敷包を正吉は膝の上に抱へ、立派な門に見とれたことや、表からでなく裏から入つたことを考へながら、何をもらつたのであらうかと、包みの上から手觸りで探つてみた。裏口から上り臺所の隅に一人で長い間待たされ、やがて母と一緒に叔母の寝てゐる枕元に呼び出された。きちんと膝を揃へ、一つ頭を下げると、直ぐひきさがつてしまつた。あの時の母は憤み深く軽く笑つたり、嘸つたり、病人の氣味をとつてゐたが常日頃の母とは、まるで違つた様子であつた。後からこはく病人の顔色を覗いてみて、もう死ぬんではないかと、正吉は一人で思つた。

叔母の家へ行つてからガラツと變つた母の様子に幼心に解しかねたが、斯うして色々の物をいたゞいたからだ、と一人頷いた。そして正吉は自分の帶の所を見ると、取つぶがつゝいてゐた。臺所の板の間に坐つて御馳走になつた親子井の飯だと氣が付くと、急に氣まりが悪くなり、あたりに氣付かぬやうに拾つたが、捨てる場所がなく、腰かけの下に

こすり付けてしまつた。井のうまい味が忘れられず舌なめずりをしながら、ふとまん前を見ると、ハツとして彼は息を呑んだ。そのまゝにズツと上の方を見、相手の顔を見てやりたかつたがおつかなく、小さい手をちつと握りしめ、どうなるものかと固唾を呑み様子をうかがつた。

彼の前に立つてゐる人の鼠色のレインコートのポケットの中へ、直ぐ隣の人の細い白い手が忍び込んだ、と云ふよりそ



の中へ五本の指が蜘蛛のやうに消え失せてしまつた。と見るうちにズル／＼と又現はれて來た蜘蛛は財布をがっちりくはへてゐた。ポケットの高さと、正吉のかけてゐる目の高さとか、ほど同じであつた。白い手は素早くズボンのポケットに隠れた。目の前の一瞬の出來ごとであつた。

あまりに近く然も突然におこつた事柄なので、どこか遠い遠いよその世界の出來事のやうにうつかり見とれてゐたが、急に體がふるへ動悸が烈しくうつた。

「正吉や、もつと側へおいで、大きくなつたら偉くなるんですよ。いゝかい、正直で立派な人に……。と、それだけ云ふのも大儀さうに叔母は床の中で云つた。一つ丁寧に頭をさげ、「うん」とだけ聲は小さいが力一つばいに返事をしたら、何かしら悲しいやうな嬉しいやうな思ひに體中がうづいた。「わかつたね。」と叔母は再び念を押してから顔をそむけた。あの時の叔母の云つたことゝ、蒼白な顔が正

吉の目の前をチラツと過ぎた。

どうしたらよい。こんな場合には一體どうしたらよい。正吉は反問しながらうまい考への浮ばないのにぢれてゐた。

電車は一ゆすれすると、客を満載したまゝ走り續けた。盗まれた人に一刻も早く氣付かせてやりたい。盗まれたことを正吉が教へたと、わかつて掴摸にひどい目に合されのが怖い。さう思ふと又も、あゝどうしたらよいのだと心に叫ぶ。盗んだ奴も盗まれた者も知らないうちに、右から左へ怪我人が出ずに財布が自然にかへつてくれれば一番よいのだ。

さう云ふ考へに暫らくうろ／＼してゐるうち正吉は、突然右足をかけたまゝ後へ引くと力一つばい前の人の向脛を蹴つた。自分でもよくわからぬうちに右足がひとりでに動き出したのだ。

「痛い！ あゝ、いた／＼ツー」仰山な黄色い叫びが上つた。車内の人々の眼は一せいに聲の主へ集つた。

蹴つてしまつてからその聲に正吉は驚い

た。危く一緒に叫んでしまふところであつた。あまりに仰山な叫び聲に驚いてしまつたばかりではない。蹴り付けようとした人の隣りから叫びは上つたのだ。盗まれた人の隣の足を蹴つてしまつた。混み合つてゐるために、どつちがどの人の足だか見當がつかなくかつた。

正吉の母はその聲にビツクリして、どうしたものかと、おろ／＼しながらあたりを見廻してゐた。母の眞前の人が痛いと呼び怒つてゐるのだ。母の上にも車内の視線は集つた。えゝツ、もう斯うなつたら最後の手よりなにと、正吉はいきなりウワアツと泣き出した。泣いて泣きとばしてやると、自分ながらうまく泣ける。面白く泣ける。泣きながら嬉しくて仕方がなかつた。

周囲の人々は、何事がおこつたのかと、痛いと呼び怒る人と、急に泣き出した正吉とに注視の眼は集つた。

さう云ふ騒ぎの最中、満員電車の中から、又も一人頓狂な叫びを上げる者がとび出した。

「大變だ！ 電車を止めてくれ。財布を盗まれた。財布をすられた！」

いよくごつた返し車内はわき上つてしまつた。痛い人、泣く子、すられた男、一同はどうした／＼と口々に叫んだ。騒ぎは廣く大きくなつた。然し満員電車はさうやす／＼とは止まらない。それに車掌は人々の頭を越え事情をくみとらなかつたとみえ、夕暮の街を走り續けてゐた。

「おい、車掌、電車を止めろ、いまこの中で財布をすられた人があるんだ！」と他の客の太い聲が叫びかけた。

やがて電車はズル／＼と速力をおとし、止まりかゝつたと思ふ刹那、丁度後部の窓際に立つてゐたつとめの歸りらしい若い女が、「これですか。」と穩かな口調で、そこに落ちてゐた皮の財布を拾ひ上げ、盗まれた人にさし出した。

「それですよ。いや有難う。そんな方に落ちてゐたんですか。をかしいですね。兎も角出て来てよかつた。どうも有難う。重い財布を

受けとると、幾度も彼女に禮を述べた。

確かにすられたのだ。この眼でそれを見た。何故床の上に落ちてゐたのか、正吉には理由がのみ込めなかつた。

胸は騒動が大きくなり身の危険を知つて素早く床に財布を落した。

兎も角財布が元の人の手にかへつてよかつた。正吉はニコ／＼笑顔を作り嬉しうにしてゐた。忠吉は母の膝の上で、いま泣いた鳥がもう笑つた。とうたつた。向脛を蹴られた客は何がなんだか解らずじまひに、とんだ騒ぎになつて今更口も出せずおとなしくなつた。母は深いことを知らず目の前の成行に眼を見張つた。すられた常人はやうやく正吉の機智を感付き、母の前に來て禮を述べ、正吉の頭を撫で廻した。母はひどく恐縮してゐたが、怪我人を出さず財布が元の持主にもどつたので、正吉は内心得意な氣持であつた。

終點近くなつてから下りる時に、すられた人は財布からいくらかの禮金を拒む母に無理に押し付けた。母は金を受け取ると、あたふ

た電車を下りた。そのあとから正吉は下り際に車掌臺の隅に青い顔のやせた男が、デロリツと鋭くねめ付けるのを全身に浴びた。思はずゾクツとしてふるへ上つてしまつた。

「これで坊やの好きなものを買つてやつて下さい。」

あのお金は正吉がむらつたものだ。それが母の手に渡つてしまつたら、もう自分の手には渡らないやうな氣がした。いつもさうであつたから。夕暮の町を家途にトボ／＼付いて歩きながら、そのことが心配でならなかつた。あれは正吉の手がらで得たお金だ。さうにがぼろく口の中で云ひ續けた。

蹴つても駄目、泣いても駄目、さうなつたら、今度はどうして母を騙してやらうか、その考へに正吉しばられてしまつた。

電車の下り際に見た胸摸のすごい眼も、死ぬかもしれない叔母の蒼い顔もこはくはなかつた。胸摸をたぶらかしたやうに、母の手からうまく金をとつてやりたいと、そればかりを彼は考へ續けた。(井上正春畫)

— 新 盆 を 迎 へ て —

憶 出 新 た な 友 田 伍 長

あき子未亡人を訪ふ 一 記 者



佛壇を背にあき子夫人と遺児英司君

新劇運動の雄、友田恭助君が昨年十月三日江南の激戦に華と散つてから、既に九ヶ月、この七月は御精霊様も歸るといふ新盆を迎へて、哀惜と思ひ出は一人新にされる。

記者は、初夏朝の太陽が爽かに眼に沁みる一日、蒲田區新宿の宏壯な伴田邸を訪れて、この貴き護國の英靈の前に額いて心からなる感謝の捧げ香を焚いた。

應接間のマンテル・ピースの上には、在りし日の友田君を其の儘に偲ぶ大きな肖像寫眞が掲げられてゐる。この像を前にして、あき子未亡人は靜かに、そして一語一語に感慨を新にするやうに語られるのである。

『築地（小劇場）で芝居をやるやうになりましたのは、震災の翌年からでした。小山内（薫）先生のお亡くなりになるまで、ずつ

とあそこでやつてをりました。」

その頃の、所謂第一次築地小劇場時代に友田君が残した足跡は誠に輝しく、日本演劇史上忘れることの出来ない幾ページであつた。長年の間、友田君と固く手を取り合つて歩んできた新劇運動の荆棘の道を、思ひ起してゐるかのやうに未亡人は靜かに瞑目する。

友田君が陸軍工兵伍長伴田五郎として應召出征したのは、事變始まつて間もない、昨年九月であつた。

——僕は演劇の方とは縁がないので餘り見てゐませんが、「西部戦線異状なし」で友田君がどもりの兵隊をやつたのを見ました。あれは大變陽氣なユーモラスな兵隊さんでした。こんど出征せられてもあんな風に陽氣ではなかつたのかと想像します——

『あの芝居は小山内先生が亡くなられてからでした。本郷座でやりました。』

——友田君は早稻田の豫科時分、僕の一つ上の組に居まして、ボートの對科レースの前でしたか、僕達の教室へ文科の應援歌を教へ

に来て、自分がリーダーになつて音頭取りをやりました。その應援歌が、また、とてもレースには勝てさうもないやうな、滑稽な歌詞なんです、忘れてしまひましたがね。その頃は實に元氣な學生でした。その後、學内で新劇研究會が組織された時も、教室へ會員を募集にきて、「僕はトモダといふんです」とポールドへ片假名でトモダと大きく書いたので、それ以來忘れられない、顔になつてゐました——

『そのお話、先日も八住さん（劇作家八住利雄氏）がなさつてゐました。いきなりドアを開けて入つてきて、大きな聲で歌ひ出したつて……』

八住君なら其の席に居た筈であらう、彼は勤勉な學生で減多に缺席などしたことがなかつたから、

『戦線では色々といふ氣持を體驗した事と思ひます。人間としてはこの上ない貴い心持を體驗したに違ひありません。もし生きて歸つてくれて、その氣持を舞臺の上で生かしてく

れたら、どんなに新劇の爲にも盡すことが出来ただらうなどと考へることもあります。けれども、役者がいくら偉くなつて、たとへ舞臺の上で死んでも、皆さんがこれ程にして下さることはない和有難く存じてをります。』

——最後の日のお姿だといふ讀賣のニース映畫を御覽になりましたか——

『いゝえ。映畫は見ませんでした。寫眞だけは見ました。あの顔は何時もの顔ではありません。何だか態としてゐるやうな顔に思はれてなりませんでした。あとで新聞社の方があちらから歸つて来てお話し下さつたのですが、寫眞を寫すと言つたら笑ひ顔をしてゐるのださうです。それで戦線で笑ひ顔は可笑しいぢやないかと言ふと、あんな顔をしたのださうです。役者ですから、その位なことはやつたかも知れないと思へますが、あの顔を見ましても、あたりがどんなに騒がしいか、どんなに切迫してゐるかと想像されます。……あの日の朝、書いた手紙が參りましたが、それには、心持は大變靜かで落着いてゐると

書いてありました。』

『お骨が歸つて來ますまでは、それが待ち遠しくて待ち遠しくて、歸つてしまひますとこゝろは遺品のくるのが待ち遠しくて……。遺品は澤山歸つてきました。けれども遺品が歸つてからはもうこれでおしまひかと思ひますと、氣抜けがしたとでも申しませうか、何だかお骨の歸らなかつた頃の方が張り合ひがありました……。けれども此の頃ではすつかり心持も落ちつきました。』

毎月三日の命日には、たゞ一人の遺兒、四歳になる英司君をつれて、この護國の英魂の永世に眠る奥澤九品佛淨眞寺の伴田家墓地に詣でて、香華を手向け、冥福を祈つてゐるといふことである。

佛壇は東と南とから光の入る明るい日本間にしつらへられてある。燈明がゆらぎ香煙のほのかに立ちゆらく中に、香を焚き合掌して、この英魂の再び三度、還り來つて皇國を護られよと希念しつゝある間に、未亡人は、庭で遊んでゐた英司君を連れてこられた。眉のあ

たり眼のあたり、友田君そっくりで、丸々と太つて丈夫さうである。

この「母と子」も位牌の前に坐して靜かに香を捧げる。佛壇の眞中には、増上寺前々法主道重信教大僧正の御名號の小軸、その左には新しい位牌に

清光院恭譽一乘天降居士

と法名が讀まれる。この名こそは、燦として萬世に輝く赫々の武勳を物語るものである。このやうな數々の貴い人柱があつたからこそ、僅か一年に滿たざる間に、これ程の戦果を收めて、既に徐州を陥れ、正に鄭州をも攻略しようとしてゐる。何物も恐るゝに足らずといふ民族的な「自信」を、我が國民がこれ程はつきりと握んだことは、過去の我が民族の歴史には全くなかつたことである。何もかも肉と血の貴き犠牲を以て贖ひ得たる結果でなければならぬ。

記者は感謝の衷情を新にしつゝ、庭に遊んでゐる英司君の健祥を祈つて、伴田邸を辭去した。(S)

S.S.S. 快愉を事仕の日はさかS筆のこへ



¥ 2.00 以上

筆年萬スインサ

平常の念佛

念佛の行は行住坐臥をきらはぬ事なればふして申さんとも居て申さんとも、心にまかせ、時によるべし。念珠をとり袈裟をかくる事も折により、體にしたがふべし。たゞ詮する所、威儀はいかにもあれこのたびかまへて、往生せんとおもひてまことしく念佛申さんのみぞ大切なる。

法然上人御法語

短歌

興謝野晶子選

千葉縣 安田 保治

ああ君よ極となりて凱旋す見ませ
打笑む喪主の幼子

(評) かかる悲しき情景を人はしばしば目
にして無量の思ひあらん、歌のしら
べまた高くして哀願あり。

京都 郡司島誠也

田植する人ら唄はずこの夏は黙し
て多く働かんとす

(評) 戦時下にある農村の緊張せる模様を
傳へて頭を下げさせる。

北海道 中村 もん

北の國よろしき夏となりにけり丘
をうづめて鈴蘭のさく

(評) 冬の長く春の短い北海道に待たれる
夏が訪づれた。作者のよろこびが鈴
蘭の咲くのを見ていよく高調され
た。

石川縣 藤田四五句

われはただ善人なれと子を祈るま
ばゆき人にならずともよし

神奈川縣 小宮 繁八

山深み水清うして氣はすめり若鮎
はしる六月にして

栃木縣 大輪 清

鮎釣ると小舟を漕ぎて出でつれば
眞晝も涼し六月の風

北海道 花田 順住

うちむかふ若葉の山にうつり行く
雪の影見てしばしただずむ

石古屋市 玉井 忠

大空につたはれよとて百尺の鐵塔
の本叩きてぞ見る

東京 三浦 碩子

紅薔薇をひたに見入りてとき久し
神のここにふれゆくごとし

東京 三野輪江雪

蛙なく田の面にちかき山の端にし
づしづと出づ初夏の月

久留米市 佐藤 眞宏

ことしげきつはものたちも初夏の
青葉を見つたのしかるらん

福島縣 栗藤 雄舟

畑打つと來し山すその霞晴れて始
業の鐘は山にこだます

朝鮮 盤江 廣吉

ひんがしは靜かに澄みて山の上に
朝日をむかふ雲のたなびく

京都 永田 七郎

召され行く捨我精進の武夫よ留守
は安かれわれら護らん

大阪 吉岡 夏生

さなきだにわれはさびしき男の子
なり峰の上に立てば松風の鳴る

京都 福島孝治郎

前線のつはもののごとつくさまし
なりはひの道書をまなぶ道

千葉縣 高橋美矢子

雨けふる若葉の道をかつくと軍
馬續きぬ重き荷を負ひ

大阪府 小山 文二

寢足らひし眼に沁々と日曜のあし
たの庭の青葉をぞ見る

飯田市 中山 弘

花散りしあとの若葉の葉櫻をぼん
ぼりの灯の清くてらせる

静岡縣 一向山人

風なきに花吹雪しぬ國のため散り
にし兵のはふりの庭に

關前 増谷シゲ子

けふもまた出征兵を見送りて心か
らなる感謝さゝげぬ

北海道 寺田 頼山

戦争はいかに久しくつづくともか
ならず來る平和をぞまつ

朝鮮 盤江八年坊

生と云ひ死と云ひ定むみちなれば
恐るることとはなしと思ひぬ

西野宮市 松成 昭

窓の邊に月を眺むる人ありぬ芭蕉
の影を頬にうつしつ

投稿規定

官製はがきに一回二首以内
とし「押土」編輯部歌壇係
あて送ること。



法然上人を繞ぐる人々

小倉の上人

江上 秀 靜

中 島 松 二 畫

上、東山の庵室

時 正治二年の秋

所 京都東山、法然上人の庵室

人物 蘭田の太郎成家、上野國の佳人、大番勤仕のため

上洛中の武士、廿八歳。

今日は久しう思ひ乍ら聚さなかつた法然上人の許へ訪づれ參らせ
たところ。門前で庵室歸りの在家の人、出家の人とすれちがふ。み
な先方から慰撫に會釋して行く。太郎は不思議相に四圍の落ついた
空気を眺めつゝ、門に入つて案内を頼む。僧一人出で來り、彼が來意
を傳へるため奥に入り、やがて數傳ひに上人のお居間に至る。お
居間の中央佛前には香爐が薫じられ、上人は經机を前に珠數爪繰り
看經、念佛のお姿。給仕の僧關東武士の來意を申上げる。圓藏のお

顔、振返りさまにお通しせよと仰しやる。僧引下りこんどは太郎を伴れて現はれる。武骨一遍の關東武士が此處まで来て少し物の敬ひを覺えたかの物腰にうつるところ。

「ようぞお越しなされた。さあずつとお近くへ」

「お見かけ通りの無作法者にございます。京に来てから諸人の噂にお上人の事、極樂往生と云ふこと、頓と合點の行かぬ話のみ耳に致します。日頃お尋ねしたいと存じて居りましたところにごさいます」

「今時の武士は凡そ我が身の武力を信じます。此の武力がどれだけの對手を屈伏したとかそれを考へます。武力が若し勝れて居ると思ふのは名譽でありますが多きは自負心となり、この自負心が、門閥と結び付いて武は單なる力となり、或は嵩じて暴力となります。武力が文の道と共に合致して、これが郷士の爲め、國の爲めに役立つものであれば上々です。あなたは、武の東國から上られた事故に、その武の素地に精神の磨きをかけられることが大切であります。」

「私は私の家門と武力を誇つて、郷里では意のままに振舞ひました。私の暴慢のために郷里の者はひどく苦しみました。私はそれが面白い慰めであり、力の誇りと誤認して居ました。弓馬の道に荒れて附近の山野を駆け廻りました。それが京に来てから人々は分相應な禮儀と作法とを取交して居るのを見ました。」

それで私の心は之を嘲りながらも自然から言語と物腰を改めて参りました。この頃市井に往來して人情風俗を見るにつけ、ふと耳に挟んだのは「念佛」と云ふ言であります。幾度も聞く内にそれは（南無阿彌陀佛）と唱へることだと知りました。だん／＼氣を附けて見ますと、念佛を口々にする人々は何となく喜悅の面ざし、溫情の持主であることでありました。それから市井の屯、諸人の談聲に注意する内に——極樂だの、往生だの、私には少しも郷らぬ言を聞きました。家人、家來に尋ねましてもよくわからぬと見え、はては念佛の道は——東山の法然上人におたづねせずばと申します。荒武者の入來お咎めもなく、私仕合せに存じます」

「宿善開發と申すことあり、あなたの心性の素直なことを喜びます。自ら弓馬の道に誇りて罪惡をしたと氣附かれたのは初發心の兆し、何よりのことであります。人間は自らの内面を省みて初めて向上の道を辿るものであります。罪惡を自覺し、現在の地位に満足せず、缺點を見出して之を厭ふ者は一歩進んで向上の生活を欲求いたします。この時人間の生活は惡を廢めて善を修養するのであります。一惡を廢めて一善を修し、次第々々に諸善萬行を修するのであります。佛と云ふのは一切の惡の斷盡せられた御方であります。善根の御本體であります。されば人間も向上して佛に成ることが出来る」と經文のお勧めであります。なれども人の世は之と

反對であつて、いかなる惡も之を止め廢めんと欲すれども止められざるを如何せん。自律戒行も修し難く、學問求道の方は一分を知つて全分を究めることの出來ぬ人ばかりであります。人間凡夫の本體は惡に黨染し、世間は罪惡の爲めに混亂して居ります。斯くの如き人々の行方を案じさせられて、どうかなしして是等の惡人輩を救ひたい、助けたいとの念願から、げにも廣大なお慈悲を以て——南無阿彌陀佛と唱へたものは必ず救済すると云ふお約束を與へて下さいましたが阿彌陀佛の御本願であります。それから更に、このご本願の上に於て念佛を申すものは、今迄その身に作した罪科一切を減ほして、まことに尊い功德を與へるとのお約束であります。そしてこの身一生世間に於て生き働いた曉、阿彌陀佛の世界である西方の極樂淨土に往生させて頂くことをお誓ひ下さつたのであります。——南無はたすけたまへ、阿彌陀佛はお互人間を救ひ取つて下さるみ佛様のお名前でありますぞ。されば念佛申すものはこの娑婆世界の務めを果し、喜悅充滿と勇みある生活をなし、死なばあなたのお淨土に生れさせて頂くのでありますぞ。西方のお淨土そこへ行くには阿彌陀佛御自ら觀音、勢至の菩薩方と共にご來迎、引接なして下さるのであります」

法然上人のお言を拜聴して居る太郎の心は、何となくやんはり抱いて貰つて居るかの大安心と、今までついぞなかつた温情を注ぎかけられて居るといふ喜びであつた。それで居てどこか大波の打寄

せるかの漂ひを眺め、どう／＼落ちかゝる瀧つ瀬に打たれたかの感じもし、花鳥風月の春秋と、焦熱氷寒の夏冬の間を往來し、ほんの座つた一時に人生の半分を経験したかの思入れである。上人のお言がみな／＼了解されたのではないが、たゞ罪ある者も念佛によつて宥される。念佛すれば救はれるといふことだけは、太郎の耳を通して頭一パイに擲がつた喜びであり同時に疑ひでもあつた。

「私のやうな罪深いものも許されると仰つて居られますのは眞實でございませうか」

「眞實——佛のお言であります」

「何と云ふ難有い仰せを承はつたこととございませう。私は今日はからずも私も眞人間に成れるかの強い喜びが味はれました。それと同時に今日迄の私の所行所作のつまらないことがきつう疎んぜられます。上人様、どうぞこの上とも私へ貴いご引導頂きますやう、平にお願ひ申上ます」

「おゝ嬉しいこととござる。厭離穢土というて穢い所には永くは居たくない、早く脱れたい、そしてもつと清淨な生活がしたいと存念するのは人間の本能であります。欣求淨土の心はいつか一度は現はれて來るものであります。だが世は無常、死の影はいつも生の體に付き纏ふところの事實であります。されば自覺の失せぬ間に道を求めることが大切なことであります」

「上人さま。どうぞ私に出家をお許し下さい」

「役人のお體、務めの中に申される念佛、強つて出家の必要もござるまい」

「役には役の枷木があり、武士には同輩の習俗がありまして仲々に抜け切られぬものでございます。出家とは云ひ條、私には出家姿、たゞ求道のための便宜として、まげてお許し願はしう存じます。それに私の役は他に代るべき澤山の武士もありますほどに——」

「一理あるお言、お望みならば剃度して差上げませう」

流轉三界中 恩愛不能斷
棄恩入無爲 眞實報恩者

正治二年十月十一日、太郎成家は斯くして出家し、僧名を——智明と云ふ。法然上人に隨從給仕すること六ヶ年。誠に殊勝な念佛の行者となつた。

下、小倉の庵室



太郎成家

太郎成家は出家して智明と云ふ。彼は法然上人の許に六箇年給仕の傍、かねて關東より召具した家の子郎從廿餘人をも得度して出家せしめた。元久二年上人の許をお暇乞して、廿餘人の弟子と共に郷里へ歸つた。昨日の武士に變る今日の出家姿、曾つては荒武者として泣く子をも恐れしめた太郎成家が發心の姿、上野の國酒長の人々は呆れてこの僧形の一行を迎へたのであつた。

あの荒武者がどうしてこんな柔和な人と變るものか、それが念佛の功德であるとするれば、信仰の力とは眞に不思議なものである。一行の歸參を喜ぶ村人は何と挨拶を述べてよいのか、たゞ「ご無事なお歸り祝着に存上げます」と云ふだけであつたが、智明房はその日から村人を愛撫して、平和な心でお互に助け合つて家業をいそしむべく教へた。どうすれば和やかな村が出

來上るか。富める村の幸を得られるか。それは念佛を申すことであると教へた。

彼は小倉の村に風變りな庵室を建てた。庵の西の方一丁を隔て、一坪の御堂を建て、こゝにみ佛を安置して香華燈明を絶ゆることなく供養する。庵の西の戸を開けばこのみ堂の眞正面をそのまゝに拜むことが出来る。御堂のみ佛は極樂よりご來迎のみ佛であり、その燈明は攝取の光明であると觀じ、智明ひとり明暮ありがたの涙を催しつゝ、

如來の光明は 過く十方の世界を照らし

念佛の衆生を攝取して 捨て玉はず。

ありがたの念佛や、み佛のご本願この煩惱妄念の我身を引接し給ふ。あの西の方、京に在します法然上人の貴きお啓示、山河へだゝると雖も恩師法然上人にも通じ、直ちに彌陀の安養界に入ることの出来る念佛。あなありがたの念佛や。南無阿彌陀佛々々と不斷に稱名するのであつた。

智明が人に接するとき、世の常の挨拶にもお念佛であり、別れるのもお念佛であつた。彼の許を訪づれる人々は同様に念佛を以て挨拶に代へ、合掌を以て會釋としたほど、次第に彼の感化は弘まつて、今では「小倉の上人」と敬はれ、彼の俗名も、出家の名も口に

するものとは無かつた。
ある日村人二三人智明の庵室を訪づれる。合掌して念佛を取交は

す。

「お上人さま昨日からお参りしたいと存じましたが、まあ村中大騒動してみんな外に出て居りましたのでついごぶさたいたしました。」

「何事か出来たかの」

「ハイ、今年も鹿がたんと來て、田も、畑も、喰べ荒すによつて、村中總出で垣を造りました」

「鹿の群れに食べられますとお米も、野菜もすつかり無くなつてしまひます。まあ小倉の一帶はえらう鹿が殖えました」

「それは皆も困つたであらう。だがこんどは鹿の方が食べ物無しで弱るであらう。どうだらう、私の領で上田三丁步造らせて、それを鹿の餌にしよう。さすれば村人も助かり、鹿も助かることであらう。鹿田三丁步。呉れぐも頼んだぞ」

百姓はその優しい心に驚いた。しかしそれからは毎年鹿の被害から逃れることが出来た。

正月元日。

庵の外、内綺麗に掃除して、遙か西の御堂に明々と燈火を入れ、香燭を薫じ四邊を清淨にこめた中、智明房ひとり念佛する。やがて表の方に人の走り來る音して枝折戸開く。

「頼まう、頼まう」

「どなたでござるな。けはしうお呼び立てとござる」

「これは西方淨土より参りたる阿彌陀佛のお使でござりまする。そなた年來お念佛の精進ご奇特のこと、お淨土では皆様疾くよりお待ち遊ばされる。何とお越しの遅いことか尋ねて参れとのお使でござりまする。いそぎ／＼お参りあるやうとのお言でござりまする。」

「これは／＼勿體なや、しばしこちらへお越し下さりませ、お粗末ながら娑婆の供養を差上たうござります程に——」

智明房自ら厨より草々の振舞物、引出物などして供養する。客殿に於ける歡喜の物語り、これは西方淨土の話ばかり。程經て極樂より使に参つたと云ふ僧上座より下座に下り、

「お師匠さま。もうお役目お見逃がし下さりませ。」

「あゝ大儀であつた、なか／＼見事な出来であつたぞ」

「きつう窮屈でござりました。冬とは云へ腋の下から汗が流れました」

これは智明房が庵の下僧に云附けて、極樂の使に装はせた狂言であつた。年老いた彼にはこの種の「構へ事」にも自からいつとはなしに歡喜の涙を流すのであつた。それから毎年正月の元旦には、この狂言をするのを習慣とした。

寶治二年九月十五日。少し病める折、舍弟淡路守俊基を招き寄せ、

「私も老病つゞいて、やがてお暇することであらうが、私の若き折の如く汝も内心を磨みて、懺悔すべき罪惡は盡く洗ひすて、念佛いそしんで、構へて安養淨土で再會を約束しよう。假令鹿を殺し、鳥を食うとも念佛せよ。敵と戦ひを交へても念佛して弓を引け。とてもかくても念佛を忘れぬやう。これが私が最後の頼みでありますぞ。さらば娑婆の對面はこれを限りとしたしませう。南無阿彌陀佛々々々」

翌十六日の夜八時、端坐合掌して

光明遍照

十方世界——念佛衆生——攝取不捨——

南無阿彌陀佛、々々々、々々々

音聲の細るまに、眠るが如く、そのまゝ息絶ゆ。

顔生きて笑めるやう。年七十五。

思へば法然上人にお會ひしてから郷里に歸り、凡そ五十年の長い月日、武道に強きをそのまゝ信仰にも強く、念佛精進の一生涯であつた。

小倉の里、持佛堂の光りは今日こそ何日もにも増して光益ひらめき、絶ゆる間なき香煙の漂ひ、僧俗共に合唱する念佛の聲々。

曾つて命の恩人なりし小倉の土人——智明房の往生のあたり、牡鹿、牝鹿の來りて細い眸で佛殿を仰ぎ、悲しい聲を放つ。

婦人ふじんと家庭かていの浄土じやうど

婦人ふじんの輿論よろん

生田花世

白米廢止運動も、大分、婦人の輿論となりつつあるやうだ。白米をやつぱり食べてゐるか、それとも胚芽米にしてゐるか、と、お互に聞きあふ聲を大分耳にするやうになつた。

六月九日、私の住んでゐる牛込區で、香川綾子女史が、醫者の立場から、實に成程とおもはれる、白米と胚芽米との營養比較の御話があつた。當日の出席者は七十人位もあつたらうか、

何れも、傾聴してゐた。明日から實行してほしいといふのが、かゝりの人の要望であつたからその言を受け入れて、翌日から胚芽米に主食を改めた人も相當あつたらうと思はれる。

白くしろくて美うつくしくてうまい、かう
 おもはれてゐる白米はくまい、上品じやうひんでお
 金かねがある人ひとが食たべるものだとお
 もはれてゐる白米はくまい、それを食たべ
 ると病氣びやうきがなほるといふやうに

おもはれてゐる白米、それを廢せよといふ事は今日の日本の國民生活について、かなり大膽な忠告である。然し、醫者から聞くと、白米が日本人の體位をだん／＼に下落させて來たのである事がわかる。人間活動の根源となるビタミンBの集塊である胚芽の部分をもんな除去したのが白米である。多く食べれば食べるほどビタミンBの缺乏も多しといふ事になり、疲勞しやすく、弱體となり、脚氣や、其他の疾病に無抵抗となるさうだ。

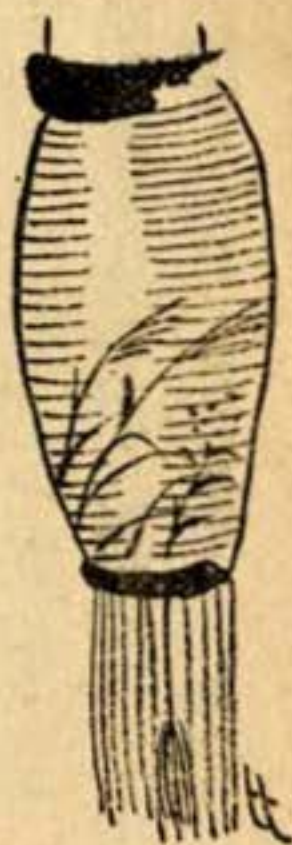
胚芽米主食運動が、今日イン
 テリ輿論であるといふ事のみに
 とどまらず、日本婦人全般の實
 行とさせるには、何よりも日本
 の習俗に對し胚芽米同様の力の
 ある佛教婦人團體の活潑な合流
 こそ願はしいとおもふ。

もてるのろじを
當世風俗學

★こみあつた電車やバスのな
かで、人の間をとほり抜ける
ときは足をあげずに、引きづつ
て歩くこと。足をあげて歩くと
かならず人の足を踏むか、泥を
こすり付けることになる。

★他人の足を踏んだときには
先ず「しつれいしました」とあ
やまつてもらひ度いものであ
る。「そんなところに足を出して
ゐるからだ」などと云ふ顔にち
よい／＼出逢ふがぜつたいに感
じが悪い。

★映画館や何んとかの集ひ
なぞで、すばしつこいところを
見せて空た座席めがけて遠くの
方から人の頭ごしに帽子など
を投げて優先権を表示するのは
どうかと思ふ。ベースボールや
バスケットボールのお手並をそ
んなところで見せるのはスポー
ツ精神のほうとくである。



眼の誘惑

貞恭婦人會 高 瀬 磯

私は二三年前まである盲人の檢校のもとへ三絃の稽古に通つてゐた。

もう五十を幾つか越え、頭を何時も綺麗に剃つて、樂器の前に端然と坐つてゐる師匠の姿そのものが、潔癖と高い藝格を表はしてゐる。

古曲を實によく保存してゐて、その透通つた音色で幽艶な繁太夫節など語られるのを聞いてゐると、恍惚として我知らず遠い近松の世界に引き入れられてしまふ。

日常弟子達に稽古を付ける時も、公開の席で演奏される時と少しも變らず、決して調子をおろさない。

一通り教へると三味線を下に置いて、やや首を傾けてちつと耳を澄せて弟子の弾くのを

聞いてゐる。

この時が稽古をして貰ふ者にとつて一番辛いときで、師匠の氣に入るように弾けるまでは何度でも繰り返さねばならない。

私が覺えそこなつて額に汗がにじみ出るような時師匠は

私の手ばかり見て眞似をしてゐるから覺えられないのだ、手を見ないで音だけ聞いて覺えなさい。

かう云ふ盲目の師匠は音の世界に眼は却つて邪魔だと思つてゐられるのであらう。事實私がどのやうに全身の神經を音に集注しようと努力しても、庭先へ小鳥が飛んでくれば振り向き、部屋の障子が少し明いてゐるのも、衣紋竹にかけてある着物がまがつてゐるの

も、眼につけば氣にかかる。

一心にお念佛申てゐる時でさへ次から次へ雜念が湧いてくるやうに、見える眼がある爲に氣が散つて無我の境地へ達することができないのだ。

音の世界ばかりでなく、人生の總てに於て眼が邪魔になる、肉眼に惑はされて見ずともよいものを見、肝腎の心の眼が曇つてしまつて本當のものを判然と観ることができない。肉眼を捨て眞諦を掴まなければならぬ。

盲人の姿はどことなく佻しい。けれど肉眼を持たない不自由と苦しさを通り越して達し得た、一種のものの寂びた落付は尊いものに見える。

信仰への道

生命の強さ、念佛の偉力

助産婦 澤 幸 江

かほどにも強い生きんとする力が人間の体内にあつたのだらうか、と今更乍ら驚かされる。それにも増して母の偉大なる愛の力。而もその母の愛を裏づけた信仰に應へる大いなる佛力に誰か感激せぬものがあらうか。記者は藤井實應氏に教へられ栗本俊道氏の西信寺鑽仰會支部に澤女史を訪れて母の愛を聴く。

得體の知れぬ病

あの子(朝彦)が十五の年でした。勤め先から歸つて来るなりお腹が痛むと言ふので床につきました。痛くてたまらぬと言ひ、私が念佛をする木魚のひびきが氣になつていけないと言ふのです。そばを通る足音さへが氣に障つて苦しいと言ふ具合に、とても苦しみました。

親戚の醫者に見てもらつた所盲腸でもなし、肝臓も肥大してゐないと言つて、別に病名も分らないので弱つてしまひました。

内科ではなく外科だと言ふので、外科へ廻されたが、こゝでも分らず、たゞ一時痛み止めの處置をする他手の下し様ありません。

次の日私が本山へお参りに行つて歸つて見ると、朝彦はもう苦痛に堪へかねて、氣が變になつてゐました。昨日までピン／＼してゐた子が、もうこんなに死相を現はしてゐるのを見て母の心はちぎれる様でした。

早速附近の醫者三人をお呼びして看てもらひましたが、得體の知れぬ病氣に誰もお互ひにゆづり合つて引き受けてくれる方ありません。

せん。親戚の二人の醫者も明日まで持つまいと言ふのです。

一晩中カンフルやブドー糖の注射、酸素吸入等必死につとめてやつと朝方まで保ち、親戚の醫者に相談して入院手術をする事にしました。

手術をして助かる見込があれば長引くのは必定ですから、どこか經費のかゝらぬ病院と言ふので淺草寺の病院に入ることになりました。

入院はしても手のほどこし様がないであらうと醫者も言ふのでしたが、それでも盲腸と腹腸と言ふ事で、手術をする事になりました。外科部長も實に大膽な人でした。

醫術の限度

然し病名も判りとは分らず、體も甚だしく衰弱してゐるので、醫者は、萬一助かる様な奇蹟があるかも知れぬと言ふ具合で生命はうけ合はぬのです。

醫師も親戚も、あなたの心一つたと言ふので母の私は、佛の心にすがり、最後の一秒を默念して我が子の無事を祈願するのみでした。

た。

右腹部を切開致しました。然し盲腸ではありません、そこで更に左腹部を切開しました。腸が猛烈に出るばかりで、流石母の私もあきらめざるを得ませんでした。が、僕一人で死ぬのは嫌」と言ふ子の生への希望に私は再び必死になつて不寝の看護を續けました。醫者はもう見離して切開した箇所は縫ひ合せもせず、ほつたらかしておく始末で、こんな危篤状態が二ヶ月、四十度近い熱が毎日續きました。(寫眞は題つた朝倉君)



醫者は見込みが

ないからあきらめないさいと言ふのでしたが、私はひとりで手術室から色の器具を持ち出しては注射をした

り、切つたお腹の

中から膿を出したりして手を盡しました。

病院の人たちも、狂氣の母のする事だから

と言つて見て見ぬふりをしてゐた様です。

一時は氣絶して假死状態になつた子が、ど

うにか氣を取りもどしたのは二ヶ月ほどたつてからでした。

恐ろしい生命の力です。而し

案外意識が判りしてゐますので、私は又一眠

の希望を持つて「もし生きたいなら食べ物を

嚼りなさい」と言つて無理に食べさせました

が、すぐにそのまゝ切開した所から膿と共に

出る始末で、終にはお腹に幾つも穴が開き、

とう／＼お臍の所に穴が開いて膿が出る始末

で異様な臭氣や奇態やらで看護婦なども寄り

つかず、私は、つわぶきの葉を煮て消毒し、

それを穴口に張つてたえず膿を取つてゐまし

た。無醫師も母の氣狂じみた所作を奇異にな

がめてゐた事でせう。

然しこの母の根氣に負けたか醫師はもう一

度手術をして病名を確かめてみる氣になつた

らしく刀を取りました。そして、手術をしてゐるうちに死ぬかも知れぬと宣告するのでした。

母として私は「解剖なら冷くなつてからで

結構です、一時間でも長く子の顔が見たいか

ら」と言ふので臍の穴や腸の所々の穴へつは

ぶきの葉を懸命に張つて膿を出して不眠不休

努めました。後で聞いたのですが病名は急性

急性腹膜炎とか言ふ事でした。

子に覺される念佛

S.S.S.

ベニカチの清らぬイエソ



サエンズ 年 用 イキ

丁度其の頃でした。苦しむ母と子の前に現れたのは「人の道」の教師でした。人の道の信者になれば、どんな病氣でも癒ると言つて、熱心に説くので、今迄浄土宗の念佛信者であつた私も子供の生命が取り止められるものなら、と言ふ浅はかな考へで、朝彦に「お前、人の道に入るか」ときいて見ました所、氣息奄々として死を待つ子は、苦しい息の中から「お母さんは、念佛すれば、癒ると言つたぢやないか。佛様の御慈悲は嘘かい？」と聞くのでした。

一時でも迷つた私の強い信仰心を鞭打つてくれたのです。足が見たいと言ふので、持ち上げて見せた所「それは棒ぢやないか、僕の足だよ！」と言ふのです。自分の足が、棒の様に骨と皮ばかりになつてゐるのも分らぬ子の姿に思はず涙が出ました。實際十貫餘もあつたのがわづか四貫目位になつたものです。

一聲二聲念佛をする我が子の苦しい息づかに母の胸は刻々に切りさいなまれてゐました。而し佛の慈悲、念佛を信じ大きな力にすぎり續け、四ヶ月後に流石の難病も癒つたのです。

一度は死んだ我が子が、醫師も不思議がる奇蹟を生んで助る事が出来ました。頼りうる佛の偉力があつたからこそ我が子は希望を捨てずに生命の力を持ち續けたのでせう。

咽喉元過れば

朝彦は病氣になる前、通相官邸の受附に勤めてゐましたので、時の通相床次さんが暴漢にねらはれてゐたとかで「お母さん僕何時死ぬか分らないよ」と主を想ふ決死の情に燃えてゐました。それほどに眞剣に勤務してゐるらしく大臣始め次官其他偉い人たちからお見舞の言葉を頂いて光榮の至りでした。そして、それらに對する報恩の爲、生きねばならぬと強い意志の力にめき／＼と恢復し

て來ました。

そして神佛への新たな感謝は再生のよろこびが大きければ大きいほど強かつた様です。

所が、十八歳になつた近ごろではお寺参りもおこたり三年前の病氣の苦しみも忘れ勝ちで母として氣に病んでゐます。年頃のせいであらうと思つてゐますが、母としての導きの足ぬ爲と思つて私はいつもお寺参りを心がけ念佛に精進を續けてわが子の生長と發心を祈つてゐます。

重 寶 記

◇縫針をさびないやうにするには珈琲滓を乾かしてつめこんだ針さしを用ひますときびません。

◇ミシン針の先の折れた時にはこはれた皿のはしでとぐと、やすりで研ぐよりもよくとげます。

◇魚類にあてられた時には茄子を生のみで食べると吐瀉するか下痢するかしてサツパリします。

わが子の闘病記録から――

國際事情解説

ヨーロッパ
歐洲の地雷火……

チエコ問題の危機

中 田 一 郎

(一)

徐州平原における大會戰が我軍の壓倒的勝利によつて終りを告げ、日支事變はここに一期を劃し、中央支那の心臟、漢口攻略戰が日程に上つてきた。極東の戰爭がこのやうな急テンポで進展してゐる時、まるで入梅時の天氣のやうに鬱陶しく、しかもマツチを招きさへすれば何處からでも發火するといった危險状態にあるのが

ヨーロッパである。狭い地域に澤山の強國が並んでゐるのだから政治、經濟、外交が錯雜し、紛糾するの無理はないが、その中で目下一番發火點に近いと見られるのがズデーテン・ドイツ人問題で知られてゐるチエコスロヴァキアである。いはばチエコはヨーロッパの地雷火である。去る四月獨逸合邦が成立してから、ドイツ對チエコの國際關係

が俄然緊張してきたことは前號でも簡単に觸れておいた。ところがこの状態はその後一步も改まらず、日に増し險惡さを増してきた。五月半ばチエコといふ小都會でドイツ人殺害問題が起り、これを契機としてチエコ軍の國境侵入問題も起り、事態はもはや血を見ずには収まらぬかといふ危機を感じさせた。ただ戰爭を懼れる各國の干涉で辛うじて爆發を免れてゐるに過ぎない。

いふまでもなくドイツはヒットラー總統に率ゐられ、多年宿望としたオーストリア併合の餘勢を驅つてチエコに臨み、これを第二のオーストリアにしようとしてゐる。このドイツの背後には所謂ベルリン・ローマ樞軸が横はり、その上ハンガリー、ポーランド、ブルガリヤといった諸國は最近とみ

に親獨的傾向を見せてきてゐるといふ強味がある。スペインのフランコ軍や極東日本が防共樞軸の一翼に連らなつてゐることはいふまでもなからう。しかし他方チエコの側にしても、おめくくとドイツの軍門に降るといつた程の弱腰ではない。チエコはフランス、ソヴェート聯邦といふ二大反獨強國と相互援助條約で結ばれてゐて、この兩者からの支援を頼みとしてゐる。又英國にしてみてもドイツがこれ以上膨張し、強大化するといふことには我慢出来ぬといつた工合である。かうした譯でもしドイツ對チエコの間に圓滿解決が見出されず、戰火を交へるといつたことに立到れば、恐らくこの兩國だけの嘩嘩では済まなくなるだらう。ヨーロッパの各國は夫々の利害關係から出發し、い

づれか一方の立場を選んで戦端を開かねばならなくなるだらう。その時は既にヨーロッパ全土の戦争であり、第二の世界戦争である。この點獨チエコ關係は獨逸關係より遙かに複雑であり、又微妙である。然もこのことは各國共百も承知なのである。そして各國共かうなることを極度に恐れてゐるのである。大戦争を忌避する氣持ちはヨーロッパ各國共略々共通だからである。そこで出來得る限り外交戰で片付けようとしてあらゆる策謀機略が火花を散らしてゐるのである。ヒットラー總統が今度も亦押しの一手で極力をつけるか、或ひは國際狀勢に氣兼ねし、テエコ問題から手を引くか、又はテエコ國內だけでまとまりがつくか、今後の豫想こそ興味津津たるものがある。

(二)

そこでテエコ問題とは一體何處かといふことを調べてみよう。一口にいへばテエコ問題は所謂ズデーテン・ドイツ人問題である。誰でも知つてゐるやうにチエコスロヴァキア共和國は、ヴェルサイユ會議でウィルソンの提唱する民族自決案によつて出來たこのテエコが決して民族問題を解決してはゐなかつた。それはこの國が單一のチエコ人だけで成立してはゐないからである。統計を見ると全人口一千四百萬人のうちチエコ人は約半分の七百四十四萬人に過ぎない。その他の他はドイツ人が三百二十一萬人、スロヴァク人が二百三十萬人、マヂヤール人七十二萬人、ルテニア人五十六萬人、ポーランド人十

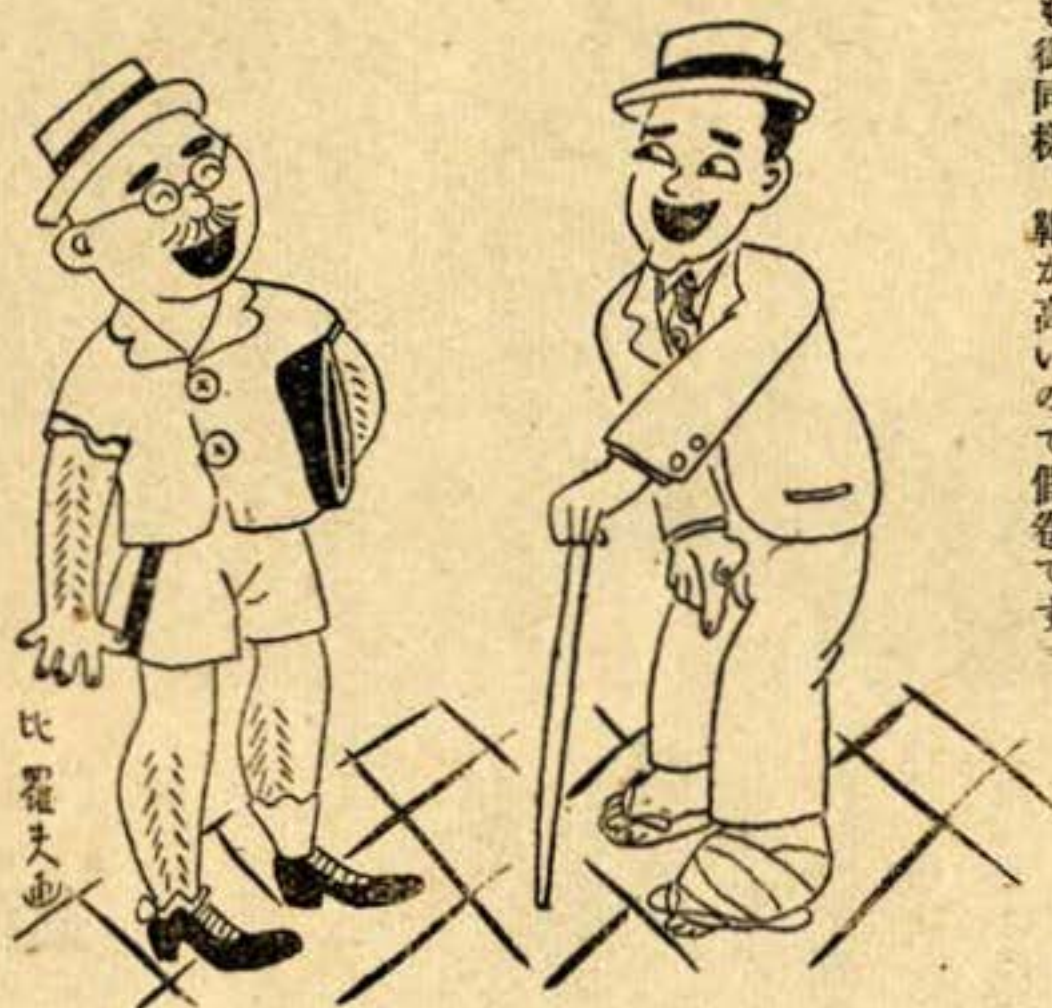
萬人、ユダヤ人その他二十數萬人といつた有様である。してみればドイツ人は少數民族とはいへ、チエコ人の次ぎに多數なのである。しかもこのドイツ人が主として舊オーストリアとの國境地方、北部ボヘミア地方といふ工業地帯に居住してゐて、チエコの國防上、經濟上からも重要な地域を占めてゐるのである。獨逸併合の結果、かうした國境地方が直接ドイツに接觸する許りか、馬蹄型に取りかこまれることになつた。

このチエコ内のドイツ人は、ドイツ本國でナチスの政權獲得以來次第に勢を得てきて、コンラッド・ヘンラインを指導者にズデーテン・ドイツ黨を結成し、猛烈な政治運動を展開してきた。政界での地位も次第に強まり、現在上下兩院を通じて約半數の議席を獲得するやうになつた。

チエコ政府は前々からこのドイツ人黨の擡頭に頭を悩ましてゐたが近年ではドイツのオーストリア併合も豫測されてきたので、それまで大猿の間柄であつたソ聯邦とも結んでドイツへの對抗準備を進めてゐた。それと同時にいろ／＼妥協案を出してズデーテン黨を慰撫しようとしてゐたが、未だくドイツ人の満足を得るまでには到つてゐないのであつた。

ではズデーテン・ドイツ黨の要求とはいかなるものかといふと、去四月二十四日、カルルスバードでの黨大會で行はれたヘンライン黨首の演説ではつきり解る。それによると、チエコ政府が國內のドイツ人に一九一九年のサン・ゼルマン條約に依て保障した平等待遇を與へないことを糾弾し、もし

漫 畫 堅 忍 持 久 大 羽 比 羅 夫



「おや、随分涼しい、いいですね」

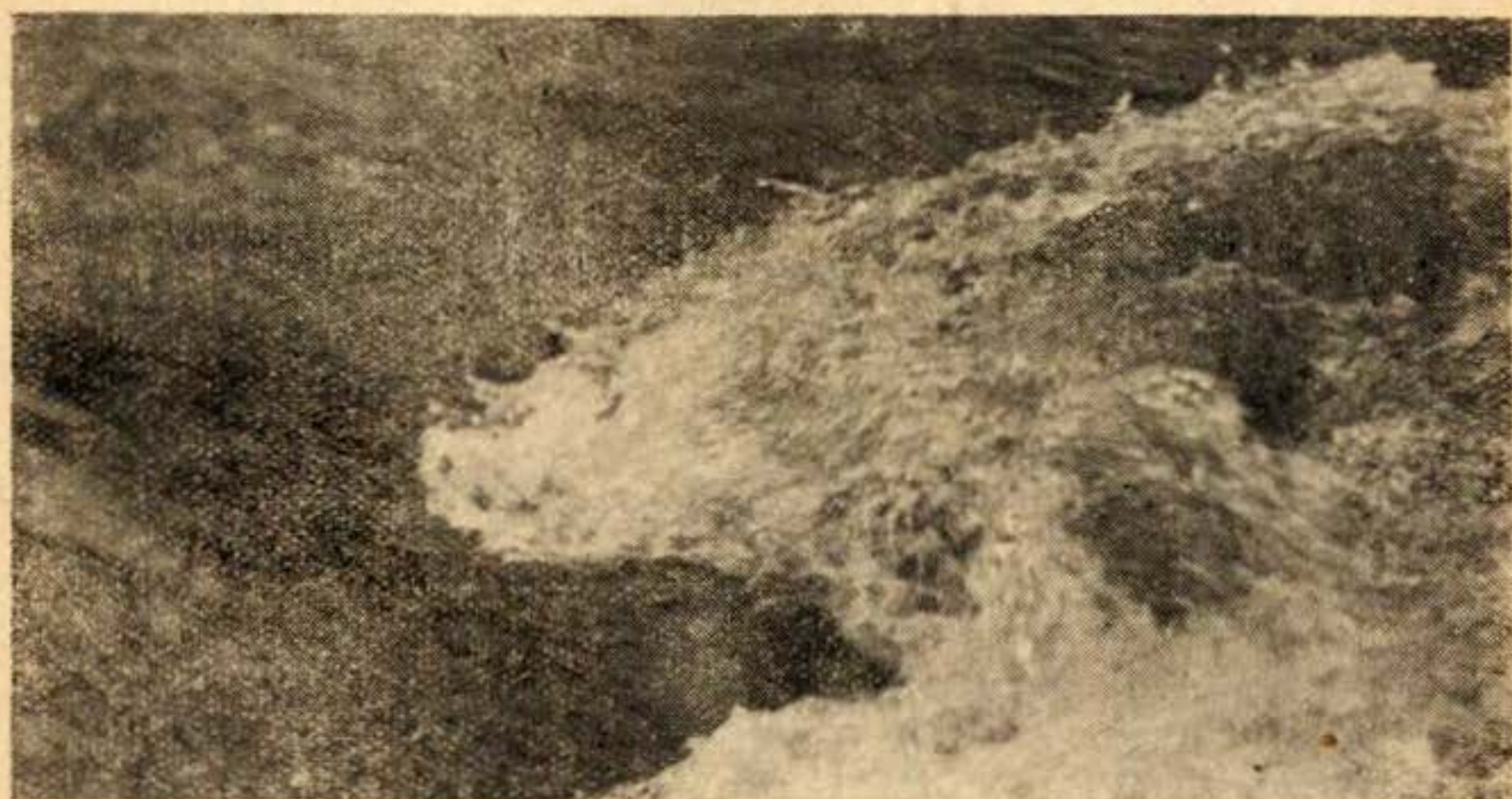
「いや洋服地が高いので小供の間は合はせたのです。」

して、貴方の足のお怪我は？」

「これも御同様、靴が高いので假巻です」

チエコ政府が眞にドイツ民族と親善關係を維持しようと思ふなら、次の三條件が必須であると呼んでゐる。(一)誤まつたチエコ國の歴史的傳統の是正、(二)チエコ國民的使命がドイツの東方政策に對するスラヴの防壁であるといふ不幸な觀念の是正、(三)ドイツ民族を敵視した從來の外交政策の是正、要するに反獨的な國策に盡く反對し、ドイツとの親善を要求してゐるのである。そしてその實現のためには八項目の要求を掲げてゐるが、その中で重要なのは、(一)ドイツ民族とチエコ民族との同權平等、(三)ドイツ民族定住地域の確立、承認、(四)ドイツ民族定住地域における自治の設定、(八)ドイツ民族主義及びドイツ世界觀を信奉する完全なる自由、といったものである。しかもこれが最少限度の

要求だといふのである。結局ドイツ人の完全な自治の次ぎにはチエコからの分離になることは必定だ。だから政府側でもおいそれとは聞かれないのである。さてドイツ政府の側では勿論全ドイツ人のドイツといふヒットラーの要求からいつて、ズデーテン・ドイツ人の要求を支持し、少く共その居住地方をドイツに併合し、その東歐での覇權確立に邁進したいといふ肚だが、今のところ英佛ソ等各國の干涉の手前、さう一氣に押し出し兼ねてゐるといふところであらう。衝突にまで行きつくか、外交戦で片付くかは別として、いづれチエコ分裂の危機は迫つたといはねばなるまい。その時はその時で、ヨーロッパの均衡は又攪亂され、紛糾は紛糾を重ねてゆくことであらう。



……
筆隨
彌陀開眼
……

醫學博士

和田正系

昭和十三年五月廿九日。

わが草庵の本尊阿彌陀如來の開眼式を修し奉る。

前日より、主人夫婦子供女中等一家總出で離れを拭き清め庭の蜘蛛の巣を拂ひ落葉を描いて平生はむさ苦しい家も少しは氣持よくなつた。床には行誡上人が増上寺に居られる頃書かれた御名號の一幅を掛けその前に卓子を据ゑて厨子を安置した。軒先に繁つた梅の青葉で初夏の日光も遮ぎられ室内は薄暗くなつたのが却つて落つた氣分を興へる。佛具も甚だ不充分不揃ひの寄せ集めのものであるが昨日家人達がよくよく拭いたり磨いたりしたものである。薄暗い室内だけに厨子の金具は

熾然と光つて思つたより美しく見えるのに主人は喜んでゐるのであつた。

佛前の花は庭に咲いてゐた撫子を切つて挿したが細い花なので引立たない。そこへ丁度近所の者が菖蒲を澤山持つて來て呉れたので早速生けると白と紫の大きい花は實によくうつるのであつた。どうやら佛様の飾りつけも終つて一同衣服を更めて時刻の來るのを待った。

東京の鑽仰會本部からは遠るく佐藤賢順師と東慈道師。それに宗務所の島野主事とが來て下さる筈であつた。思へばこれも不思議な佛縁である。長い間心がけてゐた本尊佛の完成したのはもう去年の春になつた。佛像が

出来上つたらなるべく速く開眼供養をせねばならぬといふことは知り乍らつい今年になつて了つたのである。それがこの春、島野主事の御世話になつてから、急に續仰會で開眼式をやつて下さることに話がきまつた。わが家の本尊阿彌陀如來を法然上人續仰會の方々の手によつて開眼して頂くことは實に意味深いことであると共に光榮でもあり感謝に堪へざる所でもあつた。

定刻をやゝ過ぎた頃島野主事を先頭に一同到着された。續仰會の方の他に今日は今一人珍らしい方が加はつて居られる。それは館山三福寺の河木眞靜師で、昨日偶然訪問せられ今日の事を聞かれ同僧の誼を以て態々参列されたのであつた。殊に佐藤正太教授とは同窓の御關係とかで非常に喜んで居られたのは私も嬉しい限りであつた。

御挨拶が済みひと休みされてから開眼式の仕度にかゝられる。

「これへ新しいきれいな水を——あなたがお汲みになつて——」

と河木師から洒水器を渡されて私は謹んで井戸へ汲みに行つた。必要な佛具は島野師がお寺から持つて来て下すつた。一同巖然たる袈裟に威儀を正されると導師が

「それでは之から始めます——」

と一掛されて席に就かれる。正に午後三時。



佐藤導師は中央經机の前に、東師は左端に鈴を、河木師は右端に木魚をひかへて。島野師は導師と河木師との間に。

香は焚かれ燈明は輝いて威嚴なる三禮の後

に朗々と開眼疏が誦される。

「惟るに夫れ如來の眞身は想ひ難し故に形

像を造畫し之に托して以て眞佛に通ぜしむることを致す導師曰く末代罪濁の凡夫は相を立て心を住する尙得ること能はず何に況んや相を離れて事を求めんをやと——。

四邊寂たる中に聲は尙續くのである。

「伏して翼くは眞身如來大通を以て照鑑し感應道交月の水に印するが如く長く茲に影臨し乃ち佛眼を具足し法性を覺了し給ん事を敬て白す——」

靜かに終ると導師は豫て用意された木の枝を取つて香水に浸し御佛の前に、幾度か大きく圓を描かれる。厨子の扉は開かれて青銅の阿彌陀如來は、始めてその慈眼豐頬を現はし給うた。

「しゆりまりままり——」

「まりしゆしゆりそわか——」

不思議な呪文の如く異國古代の言葉は響くのであつた。丁度この時である。開け放した部屋へひらひら舞ひ込んで來た一匹の白い蝶がある。そして御佛の周圍を一めぐりすると近い窓から何處ともなく飛び去つて行つた。

それが實に何の不自然さも無く極めて流暢に瞬時の間に行はれたのであつた。自分はこの場合と云ひ如來の眞身が蝶と化してこの阿彌陀佛像に入り給ふのかとさへ怪しんだのである。

阿彌陀經が誦され念佛が稱へられて茲に滞りなく開眼の式は了つた。

これでいよいよ私の長い間の望みも實現した。思へば十年の昔始めて佛教に心をひかれてからいつしか深く法然上人の教へに親しみ阿彌陀佛を安置したいと心懸けてから今日に至る迄如何に多くの人々に恩恵を受けたことであらう。自ら巧まずしておのづから今日の開眼に迄至つた事については唯感謝の他無いと云はねばならない。阿彌陀佛を造るにしてもふとしたことから仙臺の二高に安置せられた觀音像の御縁によつて文展審査員の國方先生にお願いすることが出来た。然も甚だ勝手な我儘を聞いて頂いたのである。又今回の開眼式の事も恰も誂へた如く然も自然に法然上

人續仰會の方々にして頂くことが出来たのである。何も彼も私の如き者としては有がたく光榮で唯々感謝の他は無いのである。

それにつけても思ひ出すのは去年この阿彌陀像が完成した時のことである。鑄造が出来上つたといふ知らせを頂いて房州の漁村から東京へお迎へに行つた。まだ春も寒い頃であつた。その夜私は珍しくも亡き父の夢を實にありありと見たのである。不孝の見たる私はそれ迄父の夢を見た事なぞ二十年も無かつたのである。父は四十五歳の壯年で亡くなつたから未だ髪も黒かつた。夢には大抵死んだ當時の年恰好で現はれると云ふが父は生きて居つたら丁度この位であらうと思はれる様子で頭はすつかり白くなつて居た。じつと私を見つめて居たが、やがて、

「おう、暫くであつたな——」

とたゞ一言口を開いたのであつた。私は餘りの嬉しさ懷しさで涙は溢れ呼吸は止るかと思ふ程胸騒ぎしてはつと目が覺めたのである。

動悸は高く胸は異様に苦しい。枕はすつかり濡れて涙は止め度もなく流れる。二十年振りで聞いたその聲は今の如くはつきりと耳に残つて居るのであつた。翌る朝私は妻に夢の話をして又つい泣いて了つたのである。

逝きましていくとせへたる黒髪の白く變りて夢に立たしき

たらちねの膝にすがりてまな兒われ

言はんとすれば夢はさめにき

妻もその後この阿彌陀像を拜み念佛した夜はよく死んだ父母や子供の夢を見ると話した。むづかしい事は知らない。然しこの佛像を拜みお念佛を稱へると懷しい父母や子供等に會へるのである。さうだ。さうだ。淨土で再會出来るのだ。私はさう思つてひそかに「再會の彌陀」といふ名を奉つたのである。法然上人の「淨土の再會なんぞうたがはん——」「淨土の再會甚だ近きにあり——」等といふお言葉を思ひ出したからであつた。



を生かすものは

上人然法

鑽仰會あるのみ

光輝ある行跡を見よ

本會が創立せられて、法然鑽仰の大旗を高く掲げて以來、既に四ヶ年を経過した。廣く社會に上人を知らしめ、上人の思想を現代に復活せしめんとするのが本會の目的であつた。

本會

は今、新なる發展へ飛躍せんとしてゐる。飛躍の前に來し方を顧みて、如何に目的が遂行せられて來たかを反省してみるのが意義ある事であらう。現在會員は二萬に達してゐるが、その大部分が在俗の方によつて占められてゐる。そして「淨土」を通じて固く法然上人の許へ結びつけられてゐる事實は、從來の宗門運動に見られざる偉觀である。法

淨土

がシツカリと把へてゐる社會各層の二萬の會員は、少くともこの現代化の基礎ともなるものだ。新しい領域に會員を獲得した本會のこの成績は、先づ目的へ一歩進み出た雄々しい發足である。次に本會によつて直接或は間接に法然上人への思慕を深められた知名の人士がある。佐藤春夫、吉田絃二郎の兩先生、或は和田正系博士等々はその最たるものである。月々の「淨土」に現はれる之等の方々の文章には、何と

強い

淨土思慕法然上人鑽仰の念が充ち溢れてゐる事か、この力強い信仰的筆致こそはまた上人を現代化する大きな推進力である。それと共に「淨土」が各方面の知名の方々に語らせる信仰的讀物も亦これに拍車を加へてゐる。次に見逃せないのは支部の活躍である。各住職が中心となつて上人御影の下に信仰具足の歩みを續けつゝある支部の動きは、上人鑽仰の大原動力となつてゐる。大阪の石井通徳氏、北海道の平井善慈氏等の在俗の方々の御盡力も亦没すべからざるものであるが、僧俗相一致して鑽仰への道を歩み續けてゐるのが、本會独自の輝やかしい姿である。そして更に喜ばしい事は舉宗一致とも云ふべき宗門大半の精神的經濟的御援助が創業以來少しも弱らないと云ふ事である。心からなる僧俗一致の精神は、上人のを最もよく把へたものである。上人を生かす道がこゝにも芽ばえてゐるので

思想

現代

ある。かく眺めて來ると所期の目的へ一歩一歩前進してゐる。上人の現代化は本會によつて貫徹されるものであると斷言しても過言でない根據がこゝにあるのだ。然しまだ緒についただけだ。完徹する爲には更に更に努力が必要である。會員を増加し、支部の動きを激刺たらしめ、思想的にもに生きるやうに各方面の人々に上人を語らしめねばならない。會員の協力に待つもの切のなるのである。上人鑽仰の立派な成績を會員全部の力で戦ひとらねばならない。實動はこれからだ。さあ共に再出發だ。曉は近いぞ。

(五十三頁より續く)

- | | | |
|---------|-----------|----------|
| 拾七圓 | 京都數區教務所振 | 鈴木義兵衛 |
| 五圓 | 千葉安房組三福寺振 | 山口數區寺院有志 |
| 貳拾八圓五十錢 | | 山口數區寺院有志 |
| 二月 | 山口縣仙崎町 | 花田俊雄 |
| 一圓 | 同 | 有田俊明 |
| 一圓 | 同 | 同 |
| 一圓 | 青森縣百石町 | 法運寺 |

信 仰 相 談

中村辨康師擔當……

(本欄への質問はハガキに住所氏名御明記の上信仰相談係宛のこと誌上匿名は可)

苦悩を脱却したい

問

悩みの餘り訴ふるに人なき爲め、思ひ餘つて私の身の上を申し上げ御指導を得たいと存じます。私の家は先祖代々當地にても相當に古く五六代も前には全盛の時代もありましたが、祖父母の代に種々失敗いたしましたして、京都に移り、私は京都で生れたのでございます。父も祖父も共に養子で、父は祖父母の嚴格さと外に事情があつて生別の憂目となり、私は寫眞より外父の顔を存じません。その爲に母は三十路位から一通ならぬ苦勞をなされたのですが、祖母は私の十九の時七十九の高齡で世を去りま

した。私は二十一歳の時縁があつて結婚いたしました。約八ヶ月程して、私の妊娠中、突然兄が死亡し、爲に何うしても兄の處に行かねばならぬことになりました。然し資産とともないので、私達夫婦が往くとすると母一人を残して行かねばならず、さねばと云つて母をつれて行けば、色々の事情で相互に苦勞をしなければならず、仕送りと云ふことも續ける事は困難なので、結局夫と悲しい別をいたしました。翌二十歳の夏女兒を分娩、他に再縁する氣にもなれず、其翌年四月京都〇〇病

院の看護婦となり、其結果免許を得て派出看護婦を働いて居りましたが、御蔭で母も私も健康だつたので、幾多の生活上の苦勞はありましたが、子供も追々成人し、女學校へ行くやうになりました。學校の成績もよろしく私も喜んで居りますと、恰度三學年の終頃から少し子供の頭が變になりました泣くにも泣かれぬ病となり、色々お祈りやおまじなひなど迷ひ苦しみ、御同情に依て病院にも四五回入院させて頂きましたけれども、不治の病は何うしやうもなく、十年間と云ふもの私も母も悩みつゞけたのでございます。大正十四年になつて他の事情もありまして、故郷で産婆を開業することとなりましたものの、新參者のこととて生活も容易なことではありませんでした。昭和七年になりました其子

供も廿五歳を一期として安らかに死に、其翌年母も七十三歳で、苦しみ續けた一生を、でも最後には本當に安らかに終られました。母には七人の兄弟がおりましたけれども皆若死で、姉が一人あり私の祖母の兄上の養女となつて居りました。此伯母もまた一人の子に先立たれそして私の二十歳の時亡くなられました。こんな譯で血統が絶え親族のやうな冷たさでかまつても呉れません。私は今五十路の坂を二つ越し全く孤獨の淋しさをつくづくと味つて居ります。身分は雲泥の差でございますが、誌上の吉田先生の御文には心打たれて居ります。さり乍ら御佛様は決して捨ては下さいませぬ。私の家は代々の浄土宗で、比較的信仰の厚い家柄でございます。祖母の祖父は一ヶ月

信 仰 相 談

も前に死期を告げて「かりの世にかりの手枕夢さめて眺むる月の影のさやけさ」と辭世を残し、日時も違はず念佛の中に大往生を遂げたと云ふことです。私も母の亡くなりました年に○寺の五重で岩井管長様の御教へを受け、一昨年から「浄土」を愛讀することを得ましてから一入信仰への歩をつづけて居り、何事も御佛様の御とりなしと、其日々々の生活を感謝しては居りますもの、愚か者の私には苦惱が次から次へと湧いて来て、世間の様々を見るにつけ聞くにつけ悩みは一入深くなりますやうな次第で御ざいます。

それにつけても第一の悩みは相續人の無いと云ふことであります。乃木大將の御殉死を偲びまして「あゝ私も氣力ある者なれば、何か大きなものの犠牲

になつて此家も私限りで斷絶させた方がよいかも知れぬ」と肩かぬ思を致しましたことも度々でございました。當地に程近い○○と云ふ處に「お伺ひ」をする方がありますが、或子供をと云ふ話があつた時、一度伺つて見ましたところ「今から小さい子供を貰うて苦勞するのはいらぬこと。まだ十年は早い。人が何と云ふとも、はい有難うと答へして置いて、今貴女が歩いて居る道を過たぬやう歩いて行けば、末は決して心配いらぬ。只管み佛様におすがりなさい」と申されました。私も中年の子供を育てることはとても不可能と存じます。さりながら今宵も知れぬ命ですもの私個人死は色々お教へを頂いて居る御蔭で少しも怖れては居りませぬが、私のやうな罪深き者でも永遠の生命の中に生かさせ

て頂く事が出来ましたとして、後細々ながらとひ弔ひして貰ふことの出来ぬ時は一體何うなるので御ざいませうか。またよし相續人があつても性質の悪い宗教心のない人ならば、却てない方がましではないかとも思はれます。寢て起きての悩みはこれで御座います。信仰の至つて居ない私にはこの事のみ夢にも現つにも悩みでございます。この遺瀨ない悩みは何うすればよろしいので御座いませうか。何卒御教導下さいませ。

答

(滋賀 女 T・Y)

「直接の回答を」との事でしたから、既に御返事申し上げましたので、此欄に再び取り上げなくてもよいと存じましたが、その御手紙に「私の運命に似かよつた方々も御座いませうし、又より以上お氣の毒な悩み多き方々もござい

ませうと存じますので、御訂正の上、誌上におのせに預りましても結構で御座います。幾分なりとも罪亡ぼしともなるかと存じます」とありましたので、餘りにおいとしい御氣持を汲みますと、御身の上をせめて世の中に人にも知らせて上げて、貴女様よりもつと小さい悩みを持つて居る方で「自分ほど不幸の者はない」と思ひ込んで居られるお氣持を柔らげ得る縁ともなればと存じまして、少し長い文章でしたが、再録した次第で御座います。御手紙に對するお答へは相當長く書いて差上げましたので、今再びそれを繰返さうとは存じません。それに私の悪い癖で、自分が何う云ふことを云つたか、何う云ふことを書いたか、それを何時までも長く記憶に止めて置かうとは思つて居りませんので、

信 仰 相 談

もはや委しい事を忘れてしまひました。一見非人情的な嫌ひがあるやうですが、然し其時に當つては眞剣に私自身の問題としてのもりでお答へしたのでございます。確か一般人としての考へへと信仰人としての考へと二通に御返事した筈でしたね。つまり一般人として相續人のない事はいけなから貰ひになつた方がよい。假に其貰つた子が出来が悪く御自分の理想に合はなくても、それをよりよく教育して上げなざるのがよく、また萬一に力及ばぬとしても自分の家を相續して呉れることに満足すべきであり、こちらとしては唯だ「よりよくなるやうに」とひそかに祈るだけでよいと存じます。世の中と云ふものは中々思ふ通りにはなりません。だからこそ娑婆即ち堪忍世界と云はれて居る譯です。で

すが何事も「縁」ですから「縁」なければ貰ひたくとも貰へない場合もないとは云へません。其他色々の場合例へば折角貰つても居付かないとか、貰つた方がよい子ではなかつたとか色々ありませう。其場合を何うするかと云へば、信仰的に解決するより外に方法がありません。凡ては如來様にお委せすることです。一體人間が相續人を欲しがつたり、お墓を立派に建てたりするころは、自分を永遠に残したい氣持があるからです。無論それだけの理由ではありません。んけれども、さうした氣持も一つの強い力となつて居ます。若し假に此事が許されるなれば、信仰に依て「永遠の生命」を得「不死の自覺」を得たならば、もう自分が完全に立派に「死んでも命のある」ところの生き續けられるものとなつて居るので

すから、信仰なき以前に持つて居た「残して行きたい」氣持とは餘程變化した心境になつて居なければなりません。即ち自分の後を弔つて呉れる人即ち相續人がなくともさう心配せずに居られる筈だと存じます。意味は多少違つて居るかも知れませんが、こんなやうなことを申し上げましたやうに記憶して居ります。それで多少御諒解下さいましたと見えて、本日また御手紙を頂きましたから、甚だ御迷惑かも知れませんが、讀者の御参考にと存じまして、貴女様の其後の御心境を發表させて頂きます。即ち

「細々とお教へ再三ならず繰返し繰返し拜讀いたしました。有り難う存じます。先生の御仰せ下さいます通りでございます。世間の有様を見聞する毎に、私の日常を考へては惱みに惱んで居りました。それに子供の時から祖母から「血統正しく續いた家だから粗末にするな、絶すな」と常々云ひ聞かされて居りましたので、それが私の心に浸込んで居て、細々ながらも續かして行かねば申譯がないやうな氣持で悩み續けて居りましたのです。然し先生の教を頂きましたして私の心の狭いことがつくづく感じられました。自分の宿命と自然の力とに相反して行けるものではないありません。縁あれば貰ひます。縁なければ無いままにひたすら修養に努めて信仰を進めて参ります。毎月淨土を讀みます時「成程」と懺悔もし反省もして居ながら、直に煩惱の雲にさへぎられて我ながら情なく思ふ時も毎々でございます。「さへられぬ

信 仰 相 談

光もあるを」の法然上人様の御歌の通りでございます。何年生きることか知れませんが今からの老先を少しでもみ佛様のお心に添ふやうに努力して参ります。先達から先生の「信仰讀本」も拜讀いたしました。永遠の生命にめざめて参りますやう懸命にとめて参りたいと存じます。

讃佛の經文

問

入營半年にして母を喪ひました私の弟は、それ以後母の法名と初七日から百ヶ日忌までとを伯父に記して貰ひ、肌の守りとして、昨秋北支に出征いたしました。九月十一日馬廠前哨戦に於て、敵前一米に分隊長としての責を全うして、護國の華と散りました。遺留品の中にまじつて

愚痴な私、何時また直接御教導を御願ひ申上げます事もあらうと存じますので、何卒よろしく御願ひ致します。誠に輕少ですが郵券を封入して置きました。傷病兵の方々に淨土誌慰問に御使用して頂きますれば幸と存じます云云」

答

ひます。宗派にこだはらぬ佛を禮讃した經文をお教へ下さい。(岡山 新見・赤井生) 御名譽のことで日本男兒としての本懐之上に上越すものはありますまい。殊に御孝心深くしました由、忠と孝とは元より同一線上のもの、忠臣は孝子の門より出づと云ふ古語の通り、一身一家を忘れて忠誠を盡くされ、あつばれ力戦奮闘の末に亞細亞復興の基石となられましたこと、さすがにお母様の法名を肌身離さず胸に抱きしめて居られたこと、まことにおやさしいその心根と、勇猛果敢な剛毅な御氣性とが渾然と融合して居る高い人格の持ち主でいらつしやいましたことが察せられます。偕て御尊ねの禮讃文ですが、大概の經典の中には「讃佛偈」又は「禮讃文」がありました何

れおとらぬもので御座いますから、今それを拾ひ挙げますことは大變で御座います。通佛敎的なものに勝曼經の「如來妙色身云云」の數佛偈とか華嚴經の「自歸依佛云云」の禮讃文とか色々ありますやうし、宗派宗派ではいづれも所依の經典の中の讃佛偈數佛偈を用ゐて居ります。例へば淨土宗眞宗などでは無量壽經の「光顯勸々云云」の數佛偈、日蓮宗などでは無量義經の「大哉大悟大聖主云云」の讃佛偈、眞言宗では「金剛界禮讃」或は「胎藏界禮讃」など、或は天台宗の法華經提婆達多品中の「深達罪惡福相云云」の讃佛偈と云ふやうに色々ありますから、それを一々比較して見て、偕て之が一番よいと決めたところで、見方の相違ですから一方から見れば臆斷に過ぎなくなりす。然し先づ無難のも

信 仰 相 談

のを求めるならば、前述の勝曼經如來眞實義功德章の「如來妙色身、世間無與等、無比不思議、是故今敬禮、如來色無盡、智慧亦復然、一切法常住、是故我歸依」と云ふのがよいでせう。また之は超宗派的なものではありませんが、淨土宗眞宗時宗などで用ゆる善導大師の「六時禮讃」の如きは實によくとまとまつたもので「讃佛偈」として又は「讃佛の儀式」として

上乘なものと存じます。一冊にまとまつて出版され發賣されて居りますから御經本を賣る店にてお求めになられたらよいと存じます。此外「法事贊」なども随分大きくまとまつたものです。それから各種の「和讃」などは日本式の讃佛歌です。また一篇のお經としてのものに「佛三身讃」とか「讃阿彌陀佛偈」とか云ふのが數種あるさうです。

ば、罪は自から消滅して、後に佛道を得ることが出来るであらう」と云ふやうな意味の文句が続いて居ります。別にむづかしい意味はありません。「過ちがあつてもそれを後悔して善い事をするやうに心がければ、自然に其罪は消えるであらうけれど、若しさうでなく其心を改

めようともしないならば、其結果としての罪は必ず報いらるにきまつて居る。それは恰も水がきまつて海へ流れ込むやうなものだ」と云ふことです。讀んで字の通りに御理解下さつたらよろしいです。つまり「過ちを改むるに憚ること勿れ」と云ふのと同じ意味です。

悔いざれば罪來る

問

佛言、人有二衆過一而不自悟、頓息二其心、罪來赴身、如二水歸海。佛說四十二章經の文句ですが、これは如何なる意味でせうか、お教へ下さい。

(大和 奥田藤作)

答

譯しますと「佛の言、く、人、衆の過ちあらば、自ら悔い、頓に其心を息めざれば、罪、來つて身に赴くこと水の海に歸するが如けん」で、其次に「若し惡事があつても其の非なることを知り、過ちを改めて善事をなすなら

S.S.S.



會社・商店向
徳用大瓶
各種

キンイ・スエンサ



説・解・語・法

崇高な自覚

法然上人詠歌

中村 辨 康

おぼつかない誰か云ひけん小松とは

くもをさゝふるたかまつ枝

夫木集

覚醒すれば

天下無敵の双葉山もまだまだ強くなるだらうと噂されて居ますが、數年前までは角通の間に於てテンデ問題にされて居らず、誰もこんなにまで強くならうとは夢にも思つても居なかつたと云ふことです。

無論人一倍の訓練努力の賜物だと思ひます。そして人は努力次第で何事でもやれば出来るものだといふいい教訓にはなります。

また人には見せないけれども、密かに「數珠」をはなさ

ず、常に袂に忍ばせて居るとか云ふ話ですが、是も他の力士とは異つた精神的な或物を持つて居ることが想像し得られ、何事でも單なる努力ばかりでなく、精神的な修練と云ふものが、如何に人々を高め得るかといふ、一つのいい參考資料になるかと思ひます。

また幕下時代に「到底出世の見込はないから力士をやめて仕舞はう」としたが、或人の諫めに感奮し、其時初めて本當に性根を入れて猛烈に稽古をするやうになつたと云ふことも聞いて居ります。つまり覺醒したのです。双葉の相撲生活に「命」が入つたのです。

其信仰が如何なるものかは知りません。恐らく大したものではありますまいが、それでも絶望の中からよく蘇り得たところに、彼の精神の奥に、生命的な宗教の芽ばえが

あるのではないかと想像されます。

何事でもさうだと思ひます。

生命なき生活は「死」に均しいものです。

然し其死に均しい生活でも、一たび「活」が入り「生命」

が蘇り「覺」めが訪れて來れば、謂ゆる「起死回生」し

て潑刺たる生氣が盛り上つて來ます。

こんな話があります。

或る獵人が山から獅子の兒を拾つて來て羊の乳で育てた

さうです。

兒獅子は母羊に愛育されて、毎日乳兄弟の小羊と共に羊

の生活をなしつゝ、なき聲も「メイメイ」と泣き、柔かな

草を常食として性質もおとなしく、歩き方さへヒヨコく

と羊の通りに自分でも羊とのみ思ひ込んで居たさうです。

羊の生活！それは極めて平凡な生活でした。毎日廣い

牧場をアチコチと母羊の後について歩き廻つて居るだけで

した。くたびれると休み、村の悪童達にからかはれると、

尻込みして泣きなどして居りました。

さうした日が幾日もく續きました。そして段々大きく

なつて行きました。

或る月夜の晩のことです。兒獅子、イヤもう今は成人し

て居る若獅子は、其夜水が飲みたくなつたので、獨り羊小屋を飛び出し池の淵まで來ました。そして心ゆくばかり水を飲んで居ますと、向ふの山の上から

「ウォーッ」

と云ふ物すごい獅子の咆號が聞えて來ました。

その聲を聞いた若獅子は大いに驚いて一旦は逃げ出さう

としましたが、二度三度續けて聞える獅子の叫び聲に、何

となく一種の親しみをさへ感じて、お腹の中で其聲をまね

て見たいやうな衝動を覺えるのでした。

不圖、池の面を見ると、月の光に照らされて、水に寫つ

て居る自分の恐ろしい顔を發見いたしました。

何時も見馴れて居る羊の顔とは違ひます。

「俺は羊ではない」

さう思ふと、一聲高らかに

「ウォーッ」

と叫びました。

「オー、何と云ふすばらしい聲か」

天地を震撼させる雄叫に、自分の心臓は高鳴りました。

「俺も獅子だ」

喜びに振へて若獅子は「獅子の自覺」に燃え立ちました。

そしてまた再び

「ウォーッ」

と叫びながら、月の輝く山頂を目がけて一散に駆け上つたと云ふことです。

羊の子としか思つて居なかつた若獅子の胸に「獅子の生命」が流れ込んで忽ちに「自覺」を呼び起したのです。

佛子の自覺

羊と思つて居た獅子の兒が獅子になるやうに、人である佛の子は佛になれないものでせうか。

梵網經の中に

「衆生佛戒を受くれば諸佛の位に入る。位大覺に同じ已りぬれば眞に是れ諸佛のみ子なり」

と云ふのがあります。

即ち戒を受くれば「佛子」の自覺に入ることが出来ること云ふのです。

而して「戒」とは何ぞやと云ふに、其次に

「釋迦牟尼佛初めて菩提樹下に坐して無上正覺を成じ已つて、初めに菩薩の波羅提木叉（戒）を結して父母師僧三寶に孝順せしむ。孝順は至道の法なり、孝を名けて戒

となす」

と云つて居ります。

して見ますれば「孝」の心を得たことが「戒」を得たことであります。

人の親への孝行が「孝」であり、國の親なる大君への孝行が「忠」であり、心の親なる如來への孝行が戒であるとするれば、如來への信順心即ち孝順心たる「信」は取りも直さず「戒心」でありますから、信佛の心が徹すれば「佛子たる自覺」が得られない筈はありません。

イヤ元と元どから私達は如來の子なのです。

「無量壽」たる「命の根元」の其一部を受け、五十年なり七十年なりの壽命を分け持つて居るのですから、それを「自らの分」として大切に保管すると共に、其與へられた「命」を無駄にしないで有効に光輝あらしめなくては誠に相濟まぬ譯で御座います。

それで初めて軌道に乗れたのであります。それで初めて如來様の大生命に添ふ心になれたのであります。

況して私達には「佛性」があること云はれて居ります。

「佛性」があるとは「佛」になれる本性を持つて居ることなのでせう。また「佛種」と云ふ言葉もあります、それ

も「佛」になれる種が私達人間にあると云ふことなのでせう。

佛性論第一緣起分には

「如來は五種の過失を除き、五の功德を生ぜしめんが爲の故に一切衆生悉有佛性と説く。五種の過失を除くとは、一に衆生をして下劣の心を離れしめんが爲の故なり、二に下品の人を慢ることを離れしめんが爲の故なり。三に虚妄の執を離れしめんが爲の故なり。四に眞實の法を誹謗することを離れしめんが爲の故なり。五に我執を離れしめんが爲の故なり。次に五の功德とは、一に正勤心（精進）を起し、二に恭敬の事を起し、三に般若（智慧）を生じ、四に闍那（智德）を生じ、五に大悲を生ず」と云つて居りますが、これで見ると「佛性」とは我執なき最高の智と悲とを得んとする「向上心」に外ならないやうです。

殊に五過の内の第一である「下劣の心を離れしめんが爲」と云ふ積極的向上心こそはやがて後の九つをも成就させるものでせう。

小成に安んぜずして常に進展を望むこの心は、正しく佛にまで高められても尙ほ捨てられない基礎的なものです。

さもなければ、それはもう佛ではないからです。さうして見れば「佛性」の萌芽は、私達の心の中に既に發生して居る譯です。

昔は「佛性」が有る無いに就て隨分論争を續けたものですが、今から思へば誠に閑葛藤で、よくもまあ議論の爲の議論に顔を赤め合つたものかと、可笑しくなります。そんなことよりも事實上の問題として自分は何うだと反省した方がよくはないでせうか。

自分が目覺め得るか何うかです。イヤ既に自分の中に萌えて居る佛性の芽の方向を何處へ向けるか或はまた何處へ向いて居るかと反省して見たらいいでせう。

有限的な「金錢」とか「名聲」とか、さういつた方向に自分の心が向いては居ないか何うか。または無限の「命」の方に心が向けられて居るか居ないか。若し「無限」と云ふ言葉が嫌ひなら、人間の最も高い價值に氣がついて居るかどうかを吟味して見たらいいでせうと思ひます。

イヤ法然上人の宗教ではそんな佛性などと云ふむつかしい事を論じては居ません。唯だ「自分の拙さ」に泣いて「如來様へすがつて行く」だけです。心の「親様」として如來様に信順して行くだけです。

云はゞ折角萌え出でた芽をぞして蔓を、如來様と云ふ大木にからませてグングン伸して居るのだとも云へませう。弱々しい芽かも知れませんが、痛々しい蔓かも知れませんが、然し其親木の天邊にまで上り得るのです。そして其のところで花をも咲かせ實をも結ばしめるのです。それ自身に強い力はないでせうが、強くさせて頂けるのが信仰です。して見ればこの信仰こそはやがて「佛子としての自信」で與へられるものである」と云へないこともないでせう。如來様は私達の心の「大御親」であればこそ私達も「歸命」して行くのですもの。

「大御親」に對して私達が「幼兒」であると信ぜられるならば自然「若者」として「自らの覺醒」に奮ひ立つべきではないでせうか。

小松から高松への生長

大原問答抄の中に法然上人の語として

「人をして欣慕せしむるの教門はしばらく淺近に似たりと雖も、自然悟道の密意はきはめてこれ深奥なり」と云ふのがあります。

如來様を慕ひ欣ふ念佛の信心は、恰度幼兒が母親を戀ひ

慕ふと同じやうな氣持だから、人間感情のある限り、誰にでも出來得ることとて、其處に何等むつかしい修道とか嚴しい戒律とか云ふやうな條件を要しませんので、從來の佛道修行の眼から眺めれば淺つばちなものとしか思へますまいけれども、自然に如來の心を我が心として行く「悟道の妙」が實現される點に於て、誠に深密深奥の教門であると云ふ意味です。

松の實は米粒にも及ばない小さなものです。しかも其中に千年以上も壽命を保ち、そしてすばらしい幹と枝とを持つ程のものが含蓄されて居るのです。

まだ「實」としてあるだけでは、其内在して居る伏能を發揮することは出來ませんが、地に蒔かれ芽を生じて「苗」となつた以上は亭々として天をも摩する大樹ともなり得るものです。ですから

「何だ。ちつぽけな小松ぢやないか」

と、さげすむことは出來ません。

念佛の信仰とても同じことです。

元より拙い私達ですが、念佛の種が下されて、信仰の芽を出しさいやかながらも如來の御心に添ひたいと「孝順心」を起して居る以上、今は見る影もないちつぽけな小松かも

知れませんが、やがては「雲をさゝふる高松」ともなれるものです。猫の子が猫となるやうに、人の子が人となるやうに、佛の子が佛になれない筈はありません。

松なればこそ、小松が大松になれるのです。

念佛の心なればこそ佛の心にまで高められて行くのです。今までは「戒」の内容さへ知らなかつたけれど、自然に「戒體」がハッキリと確立して来るから不思議です。如來への孝が醸成されるからです。

そして如來様への心が素直になります。つまり「人格」が段々高く清められて行くのです。其處に「定」も涵養されて居るわけです。如來様へ心が傾倒され、生活が統一されるからです。

不思議ではありませんか。

「戒」は事相であり「定」は心相であります。

此の「戒」と「定」とはおのづから私達の人格へ高い香りを與へます。だから「念々焚焼戒定香」とも云つて居るのでせう。

若し私の心に、そして生活に、幾分なりとも此の物心二面の「戒」と「定」とが現はれるならば、當然の歸結として必ず「慧」も現はれて來なくてはなりません。

「慧」は人格の光です。

この戒定慧の三は「三増上學」とも云ふ位で、聖道門の修行に於ける最も重大なものです。之なくしては「佛」にまで向上し得られないものとまで云はれて居ます。

然し乍ら淨土門に於ては一度捨てられたものであります。即ち淨土門に於ては凡てを「信」の一に歸納して居るからであります。

此の一旦捨てられた「戒定慧」が「信」に依ておのづから復活して來ると云ふのですから、誠に不思議のやうであります。

「身を捨てゝこそ浮ぶ瀬もあれ」

の劍道極意の歌の通り、我を捨てゝ如來へ孝順した素直な心の中に自然に獲得せらるゝことは、むしろ當然のことであつて、すこしも異とするに足りないと思ひます。

おぼつかない誰が云ひけん小松とは

くもをさゝふるたかまつの枝

何と云ふ崇高な歌でせう。何と云ふ高い信念でせう。

「佛子の自覺」です。

それはたゞ如來様へ歸命する「信」の中におのづから盛り上つて來る強い心です。實に尊いではありませんか。

編輯後記

◆東洋平和のための聖戦が開始されて以來早くもその一週ンを迎へやうとしてゐる。同時に聖戦の尊き犠牲となつた皇軍將士の新盆の月でもある。

◆北支、中南支に流した貴重な血潮が眞にその果を結ぶまでにはこれまでの皇軍の輝かしい戦果にもかゝはらず、まだ幾多の困辛と犠牲を國民は耐へしので行かねばならない。

◆戦場に身を以つて報國の實を示した親愛なる父親、夫君、兄弟の新盆を迎ふるに當つて、御遺族の方々は定めし感慨新たなるものがあらう。この時にこそ我々は深く自己の生活を反省し、黄昏の中にけむる迎へ火と共にわが家をおとづれるであらう父、夫、兄弟、親族、朋友の英靈に對して必

ず報ゆることあるべきを期せなければならぬ。

◆今月は特にその新盆を迎へると云ふ意味で、大村桂巖師に時變下の新盆に就いて書いて頂いた。田村あき子女史を訪れて、なき友田伍長の感慨をうかづつたのも以上の意味に外ならない。

◆お盆特輯號としてはまだ爲すべきことは多くあつたと思ふが、時局下にあつては常にわが家に英靈を迎ふの覺悟を以つて事に當るべしとの意味で特に孟蘭盆特輯としなかつたのである。

◆本號執筆の中、江藤滋英師は淨土宗教學部長、松浦一氏は大正大學教授、和田正系氏は醫學博士で身を以つて科學と信仰との調和に邁進せられてゐる方、江上秀靜師は福岡縣草野町にあつて、宗内新進の學徒、大村桂巖師は元陸軍教官、現芝中學校長である。

本誌廣告一手取扱

株式 正路喜社
會社

東京市京橋區銀座西七丁目
電話銀座代表 五七六六

◆本誌掲載の廣告は一切右の店で取扱つてをりますから、廣告掲載御希望の向は直接その方へ御問合せ願ひます。

◆本會出版物の御注文は振替郵便が御便利です。振替口座番號は東京八二一八七番

◆御注文の場合は種類、部數、代價を楷書で明瞭に御書き下さいますやう。尙送料をお忘れなき様願ひします。

◆勝手乍ら代金引換は一切お断り申上ります。

◆その他お問合せは往復はがきかまたは返信料同封で御願ひします

淨土 七月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和十三年六月三十日印刷納本
昭和十三年七月一日發行

(定價十錢)

編輯兼 眞野 正順
發行人

印刷人 赤尾 光雄

東京市牛込區市谷加賀町一ノ二
印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人續仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部 定價 金十錢

(送料一錢)

一ヶ年 金一圓

(送料不要)

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十三年六月廿日印刷納本 昭和十三年七月一日發行

淨土第四卷第七號

定價金十錢（送料一錢）
滿鮮臺灣
外地定價金十一錢